

2. 手記

整理番号	回 答 内 容
2	<p>1月17日まだ夜も明けきらない時、突然神戸周辺を襲った阪神大震災以来、早や10ヶ月近くになるうとしています。</p> <p>震災直後、自宅が半壊し近くの親類宅へ避難し、食料・飲料水の確保に走り回り、その合間をぬって怪我人を病院へ連れていったり、自宅の片付け等に追われあつという間に日々が過ぎていきました。又、大学へも通勤手段が途絶え又は寸断された状態が半年近くも続き、大学内も大変な被害にみまわれ、復旧に追われる日々が続きました。</p> <p>その様な最中、5月に突然入院・手術という事態にもみまわれ、一時はどうしてよいのか全くわからなくなった時期もありました。しかし、この10ヶ月近くの間には多くの方々の援助やはげましをいただき、自宅も職場も徐々に元に帰りつつあり、又、神戸周辺も落ち着きを取り戻しつつあると思います。生涯に一度あるかどうかの貴重な経験をしたと気持ちを切り替え、復興にはいましばらく時間がかかると思われますが、今後共がんばっていきたいと思っている今日この頃です。</p> <p>最後になりましたが、援助やはげましをいただいた多くの方々にこの場をかりて厚くお礼申し上げます。</p>
9	<p>今回の震災による被害は、家屋の倒壊と広域火災によるものが顕著であった。特に後者については人災による感が拭えない。災害地域は東西に細長く、海岸線沿いに集中していた。しかし津波による影響が全くなかったことが幸いであった。そこで、海と船の有効利用について、次のように提言したい。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 一時避難所として客船等の提供の申し出があったにも拘らず、芦屋市・神戸市が消極的な姿勢で、また市民の船への認識が大変薄いものであったことが残念である。そこで、最小限の衣食住が確保できた一時的避難場、さらに通信・医療設備・ヘリポートを整えることによって、災害地と安全地域との中継基地的役割の船（災害支援船）の建造が急務である。日本全土が群発地震に見舞われる昨今、国家で保有し、さらに海外派遣も可能にすべきである。 2. 消火設備としては、海水の利用が有効である。南北道及び川沿いを中心にホースと自家発電によるポンプ（小型ディーゼルエンジン直結方式）設置によって、大容量緊急放水を可能ならしめることが重要である。 <p>以上二点を、災害時より一週間以内に痛切に感じ得た。</p> <p>さらに今後の町づくりについては道路網の整備が不可欠である。阪神地域は良き海岸線に恵まれているため、第二・第三の湾岸道路の建設が必要と思う。</p>
1 1	<p>当日朝から筑波の東海村へ出張（研究会発表）の予定だった。</p> <p>余震もおさまった夕方から夜にかけて妻と相談し、結局、翌日意を決して筑波に行くことにした。約1時間かかって徒歩で宝塚へ、その後バス・電車を乗り継いで京都から新幹線に乗った。</p> <p>着いたのは夜だったが、「研究者として今出来るのは・・・」という決心が果たして正しかったのか、もっと救援活動をすべきだったのか悩んでしまった。今でもその答はわからない。</p>

整理 番号	回 答 内 容
17	<p>新聞・テレビ等で震災全般の事柄は報道されていたが、大学の様子が余りわからず、多少不安な時期もあったものの、商船大生の救助報道等を見聞して、不安な中にも4月からの勤務を楽しみにしていた気がします。</p> <p>私はまったくわからないのですが、震災後は教職員の方々の苦労は大変だったろうと思います。</p>
19	<p>私の個人的な感想ですが、地震後、交通計画や都市計画に関係する行政や学者がアンケート等の調査（それも重複する内容が多いと思われる）を大規模に実施した。なるほど今後のためにこれらをやる意味は理解できるが、しかし被調査者の苦労などまったく考慮していないように見うけられる。まさに地震以上の無秩序ぶりである。地震そのものよりもこのような事後のあり方に大いに不満や不信感をいだいた。</p>
21	<p>兵庫県南部地震（後に阪神・淡路大震災に呼称統一）に遭遇して</p> <p>平成7年1月17日（火）5時46分、突然ドーンという上下の揺れ（後にラジオ情報で過去最高の上下幅18cmとのこと）で目が覚め、その後左右にもものすごい横揺れが生じた。外へ出なければと思ったが、揺れがひどく玄関側の襖戸を開けるのが精一杯だった。今にも天井が落ちてきてこれが最後かと瞬間思ったが、どうせ死ぬなら寒い外で死ぬより布団の中で成り行きにまかせたほうが良いと思い暗い部屋からの脱出を断念した。</p> <p>どの位の時間揺れていたかはわからない（相当長く感じたが、実際は20秒位か？）が、一時揺れが納まった時、急いで懐中電灯を捜し、玄関の鍵を開け、次の地震に備えた（後にラジオ情報で震度6（後日7に訂正された）、マグニチュード7.2とのことであった）。その後水道のゴーという水の落ちる音がしたので、慌てて水道の蛇口をひねったがすでに遅かった。幸い前日の風呂の水を抜いていなかったで、トイレだけは当分の間は何とかなると思った。</p> <p>6時30分頃大学と東京の自宅へ電話をしたが、いずれも呼び出し音はすれども連絡はつかなかった（この時点では電話が生きていたので大学にあれほどの被害があったとは、予想し得なかった）。</p> <p>7時半前にいつも通り出勤するつもりで背広に着替え外に出たが、着のみ着のまま外に出ている付近の住民から白い目で見られているような気がした。バス停までいったがバスの来る気配はなく、タクシーも1台もなかった。偶然パンを買って帰る途中の力久（用度係主任）君に逢った。交通網が全てストップしているとのことで、自分も大災害を直感し食糧の確保の必要があると思ったので、念のために力久君から聞いたパン屋でパンを5個買った。帰りがけに電気屋の前で人だかりがしていたので、覗いてみると懐中電灯と電池を求める人の群れだった。ラジオが無いのを思い出しラジオと単一電池（懐中電灯用）を求めたが電池は売り切れだった。幸いラジオは手に入ったが、瓦礫の中から捜し出すような状況だったので品物を選ぶ余地はなく、しかも足元を見られたようで定価（値札とラジオ本体とは別々のそのラジオのものか疑わしい高額なもの）で買わされた。</p> <p>ラジオ情報での予想以上の被害状況が心配で、大学へ何度も何度も電話したがまったく通ぜず、あきらめかけていたところへ山口（庶務課課長補佐）さんから電話があり、大学の正門が倒れたこと、災害対策本部が設置されたことなどの情報を得た。山口さんと相談し、今日は出勤をあきらめることとした。その後留守宅に電話が通じ、とりあえず無事なことだけは連絡できた。</p>

整理 番号	回 答 内 容
(21)	<p>17日午後、前日買ったトマトジュース1本を飲み、とりあえず食料の買い出しに出かけた。あいにくメインストアのサンヨーマートは休業日でチコマートは地震のために休業とのことであった。ローソンが開いているとの噂を聞き行ったが水は既に売り切れ、インスタントラーメン等の食料もまったく無かった。ピザマンが20分程待てば入ると聞いて予約し待つこととした。他の人に悪いので3個だけ予約した。時間があつたのでもう一度店内を回ったところ、新たに野菜ジュース等が並べられていたため、野菜ジュース、キリンレモンを手に入れることが出来た。</p> <p>宿舎に戻り荷物を置いてから、もしかしてタクシーがつかまらないかと思い、もう一度出かけたところ、車はつかまらなかったが偶然チコマートが開店していた。並んでボンカレーなどを入手することが出来たが、いずれも火と水を必要とするもので、つまらない買い物をしたと後で後悔した。</p> <p>帰宅後、再度大学や職員の自宅に電話したが、山口さん以外はまったく通じなかった。交通手段が車以外不可能なため、山口さんが行ける時に一緒をお願いすることとした。15時過ぎに東京の自宅へ電話をしたところ、いろいろな方から心配の電話を戴いたと聞き、とりあえず電話のあつた一橋大学と茨城大学へ無事な旨を連絡した。</p> <p>宿舎と道路に大きな段差（50cm以上）や亀裂が生じているため、同程度の余震が来た場合この宿舎ももたないと思うが、心配して外で一夜を過ごす元気もないので宿舎で一夜を過ごすこととした（なるようにしかならないというあきらめの心境）。</p> <p>1月18日（水）午前7時過ぎ山口さんから電話があり、（出勤について）どうしますかという照会であった。ラジオ情報では高速道路が43号線に落ち、2号線も交通規制がしかれているため迂回するしか無く、今日中に大学に着けるかどうかわからない状況であったため、今日は断念し、明日の教授会には何としてでも出ようと相談した。この後力久君にも連絡したが、車で行ける状況でないということで大学への出勤は断念した。庶務課の職員の安否が気にかかっていたので、端から電話したが連絡がついたのは上田（人事係長）さんだけだった。上田さんからの情報によると、連絡がつかないのは藤原（庶務係長）さんと三村（福祉係長）さんだけであとは無事とのことであった。上田さんにこちらの状況を学長・局長に伝えてくれるようお願いし、今日の出勤を完全に断念した。その後、水と暖房用灯油を求め買い出しに行ったが、手に入ったのは若干の食糧のみで目的の買い物は出来なかった。</p> <p>手持ちの飲料水は、ペットボトル半分だけで誠に心細い限りだ。垂水は陸の孤島で、同じような被害に遭ったにもかかわらず給水車も来ないし、ガスも水も出ないのに報道もされていない。矢も立てもたまらず水の代わりに求めてビールを買いに行ったところ、近くの酒屋でジャンボサイズのビールが2本手に入った。キャップを取りアルコール分を抜き、ゆでラーメンに挑戦したが、ホップの苦みが強く食べた代物ではない。しばらくして力久君から柑橘類3個とコーヒー牛乳1パックの差し入れをもらった。食糧作りに悪戦苦闘している時、山口さんが握り飯とお茶・水入りのポットを持って来てくれた。誠に有り難かった。山口さんとお握りの食事をした後、残り半分を力久君に届けることにして山口さんの車で宿舎を捜したがなかなか見つからず、やっと見つけた宿舎は灯台元暗しで道路1本隔てたすぐ近くの棟であった。あいにく彼は水を求めて留守とのことで、子供にお握りを渡し彼を捜しに行った。彼はすぐ見付き、3人で相談の結果山口さんのお宅へ水を貰いに行くこととした。通常は20分足らずで行ける距離が往きは2時間、帰りは3時間半かかったが、お陰で</p>

整理 番号	回 答 内 容
(21)	<p>飲み水だけなら1週間程度の水を確保することが出来た。戻った時は午後7時半を回っていた。</p> <p>妻へ連絡を取ったところ九州の友達から救援物資を送ってくれるという連絡があったそうで、何が必要かとの質問に即「水」と答えた。万一に備え何か(遺言のようなもの)書き残しておこうと思い立ち、書き終えた時には夜中の12時を回っていた。</p> <p>1月19日(木)午前4時半頃、たびたびある余震の一つで目が覚めた。もう少し寝ようと思ったがなかなか寝つかれない。6時半起床。体がだるい。風邪引きのような気分だ。灯油が乏しいのでジャンパーを着て我慢する。ラジオで聞いた状況は相変わらずで出勤の術がない。大学はかなりの被害があったようで非常に気になるが、やきもきじたばたしてもどうしようもないので、成り行きにまかせることにした。山口さんからの情報で庶務課の人達は全員無事とのことで一安心した。</p> <p>8時過ぎに大学に連絡がつき教授会が延期されたことから、明日力久君と六甲越えて大学を目指すこととしたが、大学で奮闘している職員に申し訳なく、徒歩でも行けるところまで行ってみようと思東行きにチャレンジした。途中(須磨)まで行ったが、長田地区の火災のため国道が遮断されており、徒歩でも東へは行けないとの情報で途中で断念した。</p> <p>現金が乏しくなっていたので帰りの途中で預金を引き出した(昨日上高丸ただ1店の兵庫銀行へ行ったがコンピュータが故障していて引き出せなかった)。</p> <p>その後大学で頑張っている仲間に来れる限りの差し入れをしようと思い立ち、買い出しに行き3回の買い物でダンボール1個半分の雑貨を入手出来た(人目を気にしながらも差入れ用なので多めに分けて欲しいとお願いしたため思った以上の成果があった)。飲料水も山口さん宅からもらったバケツ1杯の水を煮沸し、ペットボトル3本分が確保出来た。自分の飲み水はあとポット1本分だけだが大学へ行けばなんとかなると思う。ダンボール詰めが終わった時既に午後5時を回っていた。</p> <p>午後7時10分、文部省大臣官房人事課任用班日向野任用第二係長から電話があり、知る範囲で大学の状況を報告。</p> <p>深夜(午前1時半頃)日向野氏から2度目の電話があり、被災の状況報告を求められたため、明日出勤後詳しい状況報告をすることとした。</p> <p>1月20日(金)午前4時半起床。もう少し寝ようと思ったが寝つかれず、余震もあったので早めに出勤の支度をした。差し入れの握り飯の残り朝食をとる。ポットの水は大学まで何時間かかるかわからないので持って行くこととし、湯飲み茶わん1杯の牛乳で我慢した。喉が非常に乾いている。</p> <p>何日後に戻れるかわからないし、途中何が起こるかわからないので体を清めておこうと思い、風呂の残り水(残りあと10cm位)洗面器1杯に3枚のタオルを浸し、絞った後電子レンジで2分間暖め、頭の前から足先まで体全体を拭いた。非常に気持ちが良い。何故もっと早くこの方法に気が付かなかったのか残念だ。</p> <p>7時に力久君、大学、家族に連絡をとり、8時に出発することとした。</p> <p>後日続きが書けることを願って、一旦中断。</p> <p>(大学での対応は、別添活動日誌を御覧ください。)</p> <p>1月23日(月)午前3時過ぎ宿舎へ無事戻る。午前4時過ぎに床に就く。家族に無事の電話をしようと思ったが、夜中に起こしてはかわいそうなのでやめることとした。午前8時妻からの電話で起こされ、大学・宿舎の被害の状況、20日以降の状況等を報告。</p>

整理 番号	回 答 内 容
(21)	<p>その後、国道脇を自転車通勤が可能となり、車での通勤に片道5～6時間を要することから自転車通勤としたが、片道3時間半の通勤は体にこたえたため、また交通網が部分的に復旧してからも乗り継ぎ等に多くの時間を費やさねばならない状況から、一週間のうち5日を大学に泊まり、1日宿舎、1日大阪のホテル（風呂に入りたいため）泊まりを日課とし、ガスの供給が再開された3月中旬迄を乗り切った。非常に厳しく苦しい体験ではあったが、無事に乗り切れた現在、一生のうち二度と経験出来ないと思われる貴重な体験が出来たことを誇りに思う。</p> <p>※別紙（活動日誌）有り</p>
2 2	<p style="text-align: center;">震度7に襲われて</p> <p>平成7年1月17日、早朝、2日間に亘る入試センター試験の試験場警備の仕事の疲れで熟睡していた私は、突然の激しい揺れで目が覚めた。家全体が大きく揺れてなかなか揺れが収まらない。「何だろう。飛行機かダンプカーが突っ込んできたのだろうか。」と思った。</p> <p>布団の上に半腰に起き上がって、天井が崩れたり、建物が倒れるようなことがあったら、少しでも状況を見極めて、体を安全な方向に避けなければいけないと考え、じっとしていた。</p> <p>暗がりの中で、襖や柱の線や物の輪郭が激しく揺れ動いているのが見えた。ザーザーともガーガーとも言い難い不気味な音がどこかから聞こえる。隣に寝ていた妻も半腰の状態でじっとしている。20秒程たって揺れが収まり、夜明け前の静寂が戻った。</p> <p>「地震だろうか。」とその時思った。</p> <p>立ち上がり、窓外の様子を見ようと寝室から出た。暗がりではっきり見えませんが、室内が相当散乱している。南側の窓のカーテンを開け、ベランダの向こうを見て唖然とした。</p> <p>隣接地に建っていた2階建ての木造住宅4棟のうち2棟がつぶれて1階建てのようになってしまい、屋根が大きくせり出している。</p> <p>北側を見ると、木造の文化アパートが、原形がまったく判らないくらいに崩れ落ちている。北青木公園を隔てて聳えている高層のマンション「ファミリー青木」の窓のあちこちで女性が「助けて～」と甲高い声で叫んでいる。</p> <p>「これは、相当大きな地震だぞ。」と妻に言うと、妻は何を思ったのか「私の大切な輸入品の食器！」と言いながら、台所に飛んで行った。「暗がりですんなとところへ行くと危ないぞ！」と注意するが、妻は私の言うことを聞き入れないで、食器を探そうとする。</p> <p>「行動を開始する前に、まず、懐中電灯とメガネを探さなければ…」と思い所定の場所を探したが、部屋の中は掻き回したように散乱していて、なかなか見つからない。</p> <p>手探りで食器を探していた妻が、「こんなところに懐中電灯があった。」と言って食卓テーブルの下から見つけ出してくれた。「さあ、次はメガネだ。慌てるな。」と自分に言い聞かせて、いつも机の上に置いているはずのメガネを、10分以上もかかってようやく床に散乱した物品の中から見つけ出した。</p> <p>懐中電灯で室内を照らして見ると、どの部屋も家財道具が大きく動いたり、転倒して、足の踏み場もないほどに物が散乱している。</p> <p>リビングでは、ソファ、テーブル、食器戸棚、テレビ、冷蔵庫等が30センチ位移動している。食器戸棚から大半の食器が飛び出して壊れている。テレビはキャスター付きの台ごと動いたのが良かったのだろう、落ちる寸前で止まっ</p>

整理 番号	回 答 内 容
(22)	<p>ている。フローリングの床に敷きつめた絨緞もやはり30センチ位動いている。タンスや鏡台が置いてある部屋を覗いてみると、何からどんな順序で倒れたかわからないほどに転倒して散乱している。</p> <p>私が書斎代わりにしている部屋の本棚は、倒れてはいないが20センチ位移動して、本が飛び出し、CDも飛び出して散乱していた。寒さを避けて部屋に取り込んでいた観葉植物もひっくり返っている。</p> <p>天井から吊しているリングライトは、今にもちぎれ落ちそうになっており、傘が落ちて壊れている物もある。</p> <p>「冷静に。冷静に。身支度をしっかり整えてからだ。」と自分に言い聞かせ、コールテンのズボン、シャツ、防寒コートを着用し、ウォーキングシューズを履いて戸外の様子を見に出た。</p> <p>同じ公務員宿舎に住む大学の教官5～6人が、宿舎の側の壊れた木造アパートの前に立っている。2階建ての長屋のそのアパートは、まるで木屑の上に瓦が転がったような無残な姿になっている。地震で揺れている時、家の中で聞いたザーザー、ガーガーという不気味な音は、屋根瓦が崩れ落ち、アパートが壊れる時の音だったのだ。</p> <p>寝巻き姿でコートを肩に着こんだ中年の女性が、目を赤くして、崩れ落ちた屋根を指しながら、「あそこに年寄りと子供がいるのです。助けて下さい！警察を呼んで下さい！」と声を振り絞って叫んでいる。</p> <p>たった今、中から這い出してきたのであろうか、寝巻き姿で頭から布団を掛けた40才位の男性が、呆然とつぶれた屋根を見ている。</p> <p>「どこだ！どこにいる！」と建物のわずかな透き間に入ろうとする者がいる。崩れ落ちた大きな屋根を見て、「これは人の力では到底駄目だ。」と言って引き返す者もいる。</p> <p>周りに集まってきた人の数は、20人位になった。しかし、崩れ落ちた屋根に手をつけることは出来なかった。きっと、町中がこんな状況で、警察も消防署も来やしないと思った。</p> <p>その時、私は、我に返った。「大学に行って様子を見なければ…。会計課長としての職務を果たさなければ…。」と言う思いが頭にのしかかってきた。</p> <p>家に帰って、近所に住む担当係長に電話をしたがつかない。電話が不通になっている。不吉な予感がした。</p> <p>妻が、南の空を眺めて「火事の煙が出ている！」と叫んだ。ベランダに出てみると、阪神青木駅の方角で火の手が上がっているのが見えた。ここまで火が回ってくることはないだろう。</p> <p>家の中を辛うじて歩けるようにしておいて「ひとまず大学の様子を見に行ってくる。」と妻に言い残して、7時過ぎに、私は、家を出た。</p> <p>大学までの15分程の道は、いつものコースなのに辺りの光景はまるで違って見えた。道路はあちこちで亀裂が生じ、デコボコになっている。歩道の縁石は崩れている。</p> <p>新聞販売店と八百屋があった2階建ての建物は、1階がつぶれてなくなってしまい、その前の電柱が倒れかかって、頭上のトランスが今にも落下しそうだ。その下を小走りに通り抜ける。</p> <p>「オオギハウス」という10世帯程の大きな2階建ての木造アパートの1階部分が完全につぶれている。寝巻き姿の人が、2～3人、建物の側で何かごそごそしている。</p> <p>本庄中央公園前の古いアパートも同じように1階がつぶれ、2階も、どのようになっていたのか良く分からない。人は皆、あまり外に出ないで、じっとし</p>

整理 番号	回 答 内 容
(22)	<p>ているのだろうか。</p> <p>道路を往来する車もなく、人も少なく、静かな、寒い冬の朝だった。</p> <p>大学に辿り着くと、完全に倒壊した正門が目飛び込んできた。重い石と鉄製の扉が倒壊している。「堅固なこの門が…。」と啞然とした。すぐ側の守衛所から警備員が出て来て、仁王立ちで立っている。少し離れたところに、学生が2～3人、講堂前の椰子の木の下に、付近の住民と思しい人が数人、佇んでいる。</p> <p>警備員が、「学生が怪我をして、先程、車で病院へ向かいました。大学の係長さんや関係の方に電話をしても全然つながりません。」と落ち着いて状況を説明してくれた。</p> <p>構内に目を走らせると、構内道路は盛り上がり、亀裂が走っている。「大変な事になったね。見張りをよろしく。」と警備員に言葉をかけて構内に入っていくと井上学長に出会った。</p> <p>山手の高台に住まわれている学長は、「車を飛ばして、たった今、来たところだ。我が家は無事だったが、来る途中、街中がずいぶん酷い事になっていた。」と話された。</p> <p>学長と二人で構内を一巡して見ることにした。</p> <p>火災は発生していない。道路は至る所に亀裂が走っている。事務局や講義・研究棟の物は、ざっと見る限り、余り被害は無い様に見えた。</p> <p>グラウンドを経て岸壁のほうに向かうにつれ、凄まじい光景が広がっていた。グラウンドをまっぶたつにするように、幅20～30センチ位の地割れが東西の方向に走っている。</p> <p>広い範囲にわたって、地中から水が吹き出している。小さな砂が地面に吹き出して、丁度、火山の噴火口の様に見える。</p> <p>海岸沿いに建っている建物が傾いているのが遠くからでも分かった。海岸に出てみると防波堤が決壊し、広範囲にわたり地面が陥没していた。足下に注意しながら建物に近づいてみると、建物の基礎から根こそぎもぎ取られる感じだ。</p> <p>海技実習棟は、海岸の方に倒れかかっている。足早に前を通り抜け、陸揚固定してある進徳丸の側迄来た。</p> <p>陸地にくっついているべき船体が、透き間が出来て高橋川の河口の方に傾いている。近くの道路に幅1メートル程の地割れが生じている。おそろおそろのぞき込んでみて、「ここに落ちたら死ぬかもしれない。」と思いながら、その場を離れた。</p> <p>構内を一巡する間、人には出会わなかった。</p> <p>「火災になっていなくて良かった。電話も通じていない。とにかく、出直してこよう。」と思い、学長も私も、守衛に「いったん帰ってくるから」と言い残して、8時30分頃、大学を出た。</p> <p>家の事が気掛かりで、一目散に家に帰ると、妻は、散乱した物品の片付けをしているところだった。</p> <p>「飲料水は、丁度、ボトルが少しあって良かった。洗いは、風呂の残り湯が貯めてあるからそれを使ってね。」と真っ先に水の事を心配していた。</p> <p>水が出ないのに、水道の栓をつい捻ろうとする。停電しているのに、ついスイッチに手を触れる。日常の基本動作は、簡単に直せるものではなかった。</p> <p>テレビがつかないので、地震の大きさや震源地等さっぱり分からなかった。ラジオは、乾電池と兼用式であるが、もっぱら電気で聞くことにしていたので、電池の予備はなかった。</p>

整理 番号	回 答 内 容
(22)	<p>やがて、国道を走る緊急車のサイレンや鐘の音がけたたましく聞こえ始めた。空には、ヘリコプターが何機も飛び交い、騒音が耳に痛いほど響きわたった。</p> <p>朝食を済ませ、改めて支度し直して出勤しようとする私に、妻が不安そうに、「こんな時に、出て行かなければいけないの？」と話しかけた。</p> <p>「どんな事になるのか分からないが、会計課長だから出勤しなければ。」と言いつつ、10時過ぎに、再び、大学へ向かった。</p> <p>街の様子は、一変していた。自転車や人が忙しく行き交い、車も頻りに往来している。道を歩きながら、「大都市が非常事態になったのだ。関東大震災や戦争の時の空襲もこんな風だったろうか。治安が悪くなって、暴動が起きないだろうか。」と考え、いつの間にか体が震え、目頭が熱くなってきているのを覚えた。</p> <p>「自分は、怪我ひとつしていない。しっかり頑張るのだ。できる限りの事をやるのだ。」と自分自身を勇気づけながら、ひたすら前を向いて大学へと急いだ。</p> <p>大学に来てみると、正門を入った所に、毛布を脇に抱えて避難してきた人や、石油ストーブで暖をとっている人が数人いた。倒壊した家から這い出して、着の身着のまま避難してきたのであろう。</p> <p>事態を目の当たりにするにつれ、心の中に、怖さと不安が広がってきた。</p> <p>「本当にあった事だろうか。こんな事が現実起こっているのだろうか。夢ではないだろうか。」何度も何度もそう思った。</p> <p>しかし、この時から、大きな被害を被った神戸商船大学を復旧しつつ、大地震に遭遇して大学に避難してきた人々を救済するという私の、忙しくて、辛い、緊張した長い日々が始まったのである。</p>
25	<p>大学も復興の槌音が高かった第一段階をすぎ、少しずつ平静を取り戻しつつある。町並は瓦礫の山が取り払われ、更地の箇所が増え、気の早いところではすでに新しいビルが出現し始めている。ずい分とひどい目にあったあの数か月間も少しずつ忘却のかなたへと押しやられようとしている。人間の記憶は実にいかげんなものだと思う。</p> <p>やはり何か書き留めておかねばという気が当時からしないでもなかったが、書けば長くなるし毎日の生活で精一杯で余裕もなく、結局は無為にすぎたようだ。さりとて、今の時点で少しでも書き留めておかなければ後になってただ懐かしさのオブラートに包まれて大切な本質を忘れてしまいそうになる。そこで、私は神戸の人々に受けた2つの親切について考えたことを記しておこうと思う。</p> <p>約百キロも離れた田舎に住んで相変わらずの山々や田んぼを見慣れていると、大自然に身をゆだね、雨に打たれて無理なく土に還れるような感覚になる。そこから神戸のような瀟洒な大都会に通勤していれば、三宮などで行き交う人々はキビキビしているものの何だかどっつきにくく、とりすましているようで場違いのところに入りこんでしまった印象を持ってしまう。けれども慣れというのは恐ろしいもので、一週間のうちに高層ビルが出現しても驚かず、効率の良い都会の雰囲気になじみ始めていた。</p> <p>そこへ大地震。中国縦貫道経由で六甲の北側の谷上までたどりついたものの、駐車場では「満車」の看板が入車を拒んでいた。何日先に帰宅できるかも定かでなく、きっと料金も高額になるだろうと心配しながらその駐車場の人に1台くらい駐車できるスペースはないかと念のため聞いてみると、白髪まじり</p>

整理番号	回 答 内 容
(25)	<p>の管理人は実に快くすぐ隣の工事用車両置場の隅を教えてくれ、場合が場合だから無料でいいと誘導までしてくれた。</p> <p>ほっとしてトンネルを電車で抜けるとそこはJR新神戸駅。あたりでは異様なサイレンの音がひっきりなしに鳴り、傾いたり倒壊した家屋の世界が広がっていた。震災ルックの人々の間をくぐり抜け東方へと歩き始める。約2時間(?)歩いて疲れはて、とある駐車場前の花壇の縁石に坐りこみ、物悲しい程澄んだ空を見あげていた。大学は阪神高速に近いからかなり被害をうけているだろうなあとか、亡くなった人はいるのだろうか、研究室に新しく入れたコンピューターは多分だめだろうなあとか考えていると、一人の中年の人が震災前後の話をおぼろげに語り話しかけてきた。「どこから来たのか」と聞かれ相生と答えると、自分は神戸生まれの神戸育ちだが相生には父親の仕事の関係で何回か行ったことがある、ところでこの駐車場を管理しているが、今はヒマだから、渋滞しているところまでなら自動車に乗せていってやろうと言う。見知らぬ人なので遠慮すべきとは思ったが、さりとて、深江まではかなり遠いので好意に甘えることにする。青木あたりで渋滞しはじめ降車。</p> <p>ところで、このパニックの折に見知らぬ人から二つの親切をうけたことになる。こういう異常事態にもかかわらず、否、異常事態に臨み、平常身構えた毎日の不要な上着を脱ぎ捨てたからこそ、人はありのままを語り自己をさらけ出すことができるのだろうか。そして困っている人に遭遇した時に銜いなく援助の手がさしのべられ、やさしくできるのだろうか。神戸のような一見冷たく見える大都会に住む人々の背後にある朴訥さと人間性を垣間見た思いだった。</p> <p>二つの親切以来、そして大学に着いて後、余分なものを削ぎ落としてただ大学の復興を目指して活動する教職員の人たちや学生諸君と何ものかを共有できたと感じて以来、神戸という町が一層近く感じられたのだった。多数の尊い人命を奪われ、多大の被害を受けたことは残念この上もないが、結果論として大切なことを教えられたように思う。そして私も虚飾の上着をこれからは一枚でも多く脱ぎ捨てようとの思いを新たにしている。</p>
27	<p style="text-align: center;">長かった大学への道のり</p> <p>1月17日(火)5時46分、阪神地方では想像だにできなかった兵庫県南部地震が発生し、死者5,500人以上を出す未曾有の大惨事となった。</p> <p>恐怖の地震の揺れこそ体験したが、幸い私の住む(大阪市西淀川区佃、尼崎市とは川を一つ隔てているだけ)マンション(1階13戸、11階建)は外壁にこそ縦横の亀裂が走ったが取り壊すほどの重傷でもなかったのと、私の家は2階の東端に位置していたため、箆筒や食器棚等の倒壊は免れ、表面的にはなんら変化がなかった。(同じ建物でも中ほどの家は、大学付近同様、家の中は滅茶苦茶になり、壊れ物をゴミステーションに運び出す人の中には、けがをした人が数人いた。)10分程電気は消えたがすぐに復旧し、所詮この程度の地震かとの思いがあった。それでもいつもより1時間早く、我が家を出発した。通常ならば30分で着ける距離なのだが、今日は着くことができなかった。</p> <p>尼崎を越えるあたりから、道路は隆起し、何やら高速道路さえ傾いているように見える。目の錯覚か凝らして見たがやはり傾いているようだ。そういえば周りの建物さえ何処となく傾いているような気がする。実際傾いていたのである。</p> <p>甲子園までは意外と被害が少なく見えたが、西宮に入ったとたん、路地という路地の木造家屋の多くは倒壊し、鉄筋のビルでさえ1階部分が壊れ、その形状をわずかにとどめているに過ぎない。道路は至るところで隆起し、また陥没</p>

整理 番号	回 答 番 号
(27)	<p>しており、まともに車で進める状態ではなかった。1時間たち、2時間たってもわずかしが進まない。12時をまわっても依然状態は同じ、ラジオから流れる被害状況は時が経つにつれ、ますます広がり絶望感さえ漂う。</p> <p>13時30分、依然状況は変わらず、お腹の虫も騒ぎ出し、今日はやむなく我が家へ引き返すことにする。通信網は大混乱、大学の電話回線も、停電でストップしたまま、連絡のつかぬまま、まんじりともせず夜を過ごす。</p> <p>明けて18日、今日こそはと意を決して、昨日より更に3時間も早く家を出る。状況はますます悪くなっていたが、朝が早いせいかわゆるりではあるが車は流れている。昨日通過できなかった西宮以西、芦屋が近づくにつれ、"震度7"の想像を上回る激震の跡が夢の中の出来事と見間違えばかりに、生々しく展開している。声も出ないほどのすさまじい光景がまのあたりにあった。通常は30分でつくのに、実に4時間30分かかって、ようやく大学に辿り着くことができた。</p> <p>あれから9月たった今、大学自体落ち着きを取り戻し、表向きは何事もなかったように日常のサイクルを刻んでいるが、秋の気配が漂い始めた大学の正門をくぐる時、あれはやっぱり夢だったのかと錯覚に陥る時があるほど、あの時は大学までの長い長い道のりを経験した。</p>
30	<p>【今回の震災で感じたこと】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 常日頃に、公務員としての職務遂行意欲の啓蒙活動の必要性である。 2. まず、組織として自ら復興する意識を持ち、教職員一丸となって、組織・施設の復旧に立ち上がるべきである。教育者であっても施設の復旧に携わるべきであり、ボランティアの方はその手伝いをして頂くという考えでなければならない。 3. 災害の発生時期（勤務時間中・通勤時間中・自宅滞在時間帯等）を考慮した防災体制の確立の必要性である。 4. 報道機関等のかかわりも重要であるが、緊急一時的時間（期間）が過ぎれば、本務復興に向けた体制を中心とした活動をすべきである。 5. 本学のような少人数の職域においての、本務と救援活動を長期間24時間体制を維持できる勤務体制の確立を検討すべきである。 <p>※最後に本学学生の地域住民の救援活動と、事務職員の大多数の者が、職務並びに避難住民の支援に、昼夜をいとわず頑張られたことに対して、深く敬意を表します。</p>
32	<p>今回の大震災により、知人夫婦・従姉を亡くし、実家は半壊、友人達の家も全焼・全壊が多く、仮設住宅も遠くしかなくて遠方から通勤している友がいます。どのように慰めて良いのか言葉が見つかりません。</p> <p>一日も早く神戸の街が復興されますようにお祈り申し上げます。</p>
33	<p>形ある物は壊れるものだ、ということを知りました。</p> <p>失った物の中には、二度と手に入れない物もありますが、被害が「物」で済んだことに感謝しなければならないのでしょうか。</p> <p>全壊認定を受けた家屋に住みながら、家族に怪我が無かったことは幸運でした。</p> <p>震災後、物欲が薄くなった反面、物事に執着する心も乏しくなり、大袈裟に言えば、心の根っこに虚無感が住みついてしまった様な気がします。</p>

整理 番号	回 答 番 号
(33)	<p>活気ある生活を続けていけばこれを払拭できると思いますので、当面の仕事に意欲を燃やして行く積りです。</p> <p>空元気でも、元気の内です。</p>
3 9	<p>震災の翌日の朝、避難していた小学校（？）で西宮北口から阪急電車が動いているという話をききつけて、阪急神戸線の線路の上を、妻と2人で西宮北口駅目指して歩いたのが一番印象に残っている。</p> <p>妻の親戚が大阪にいるのでそこを目指したのだが、ようやく乗れた電車はひどい混雑で、西宮北口から梅田まで、ほとんど片足でたっていた。</p>
4 2	<p>今回このような大地震を経験して、人の優しさ、つながり、一人の弱さ、自然脅威等を強く感じました。</p> <p>避難所で、顔も名前も知らない人に優しくしてもらった事、戦中戦後の体験や緊急時の知恵を聞かせてもらったりした事、家族の事を心配している様子など頑張る気持ちや元気を与えてくれた人々にまず感謝したいです。</p> <p>また、友達や家族そして親戚に連絡が遅れ大変心配をかけてしまって残念でした。</p> <p>一人では何もできないが、人の助けを借りれば何かができる。人を助ける事によって助けてもらう事もある。一人は何て小さくて弱いものか、人間て何て強いものかと思いました。</p>
4 4	<p>「被災者になってわかったこと」－思いつくまま－</p> <p>激しい揺れの後、いったい何が起こったのか。しばらく茫然としていた。我に返り、別々の部屋にいる家族に声を掛けた。返事が返ってきた。一応、全員無事だ。返事を確認した後、あの大きな音の結果を探るべく、真っ暗な部屋の中を明かりを求めて徘徊した。手や足に当たるものは何なのだ。テレビや楽器、本、植木鉢が割れて泥が散っている。水がこぼれている。いろいろ散乱しているらしい。</p> <p>早くも階上の人が安否を尋ねてくれた。ありがたい。返事をして襖を開けようとしたが弓のようになり、私の力でも開かない。何かが倒れ込んでいるのだ。もがき、あせり、暗やみの中で必死の形相だが、何も手につかない。隣室の子供も出られないらしい。この時点でわかったこと。私と子供は閉じ込められ、家内はタンスの下敷きになってたことから、もし火事なら……と思うと。階上の人が尋ねてくれた安否確認の重要性のこと。</p> <p>どのくらい時間が経ったのか、ともあれ全員無事脱出。夜が明けた。窓から見る周りの景色は静かだ、しかし良く見ると道の向こうで家が倒れている。道路は亀裂が入りアスファルトがめくれ上がっている。ところどころに陥没もある。外に出て宿舎の中を見回った。この時わかったこと。予想だにできなかった地震による被災者になっていたこと。</p> <p>電話は通じない、水は出ない、ガスも出ない。幸いにも電気は早い時期に通電した。テレビで長田の惨状や伊丹の駅舎倒壊を知った。出勤しなくてとはと、気持ちが焦る。今日は委員会がある、教授会の資料もある、しかし私は自治会の役員（各棟から1名ずつ選出、輪番制が多い）が当たっていたのだ。出勤を焦る気持ちと裏腹に、宿舎の路上に集う数人の役人たちと、この惨状を何とかしなくてとはと、そちらのほうに気持ちが大きく傾いた。この時わかったこと。焦っても仕方がないこと。取りあえず出来ること、やれること、そして目の前</p>

整理 番号	回 答 番 号
(44)	<p>のハードルをクリアしなければならないこと。</p> <p>この日、自治会の役員はよく走った。夜明けごろはけが人を、特に単身赴任者の安否を重点した。幸い死傷者はいなかった。次は各戸の被害状況を確認するため、各棟月当番を通じてメモでの提出を連絡した。回収は役員のメールボックスとした。メモは財務局との相談資料とするため（被害状況はのちに財務局が動いてくれる大きな材料となったらしい）。次に環境整備上、各戸から出る破損物品等の置き場所を指定した。結果的に正解だった。おびただしい量が搬出された。</p> <p>18日朝、出勤準備の時、テレビが東灘区のカス漏れ事故を報じていた。範囲が広がっている。出勤を見合わせ、様子を見ることにした。</p> <p>外に出ると私達の棟の汚水管から汚水がしみ出していた。建物が前後左右に相当揺られたらしい。確認のため埋設箇所を掘った、見事な段差による破損。全棟に知らせ、残った入居者で応急処置を行った。これで毎日のトイレは自宅で可能となるはずだ。この日も無我夢中で過ぎた。夕刻、ガス漏れによる避難勧告は解除された。出勤は明日にする。この頃から、管理人、他の役員や入居者のほとんどが避難していた。</p> <p>この日以後、残った入居者でいろいろ対応することとなった。我々は4名残っていた。財務からの連絡、その他生活情報等、電話が不通のためメモをもって走り回った。避難している者には公衆電話を利用した。が不通、通じても不在が多く、連絡は困難を極めた。その割、会長が避難していたこともあり、苦情電話が昼夜を問わずよく掛かってきた。家内はつらかったと思う。それ以上に、他の3名の役員の方は仕事を休み、苦情を聞き、連絡や調整のため奔走してくださった。感謝申し上げたい。この時わかったこと。一人では無理なことも、衆知と結束力があれば、何とかなるであろうこと。</p> <p>風呂と夕食のため、大阪方面まで走った。ネオンは輝き、行きかう人は笑顔でいっぱい、とても楽しそうだ。物も豊富だ、まるで別世界だ。地震のことなどどこ吹く風、の様に見えた。ファミリーレストランに入った、久しぶりの暖かい食事だ。しかし、なぜか後ろめたい気持ちがあった。こんなところに来ていること自体が罪悪のように感じた。</p> <p>同様に、震災直後の新聞コラムを読んで非常に感激したことがあった。もう一度読みたくて、震災記録集からコラムを拾った。あの時の感動が起らない。なぜだろう、悲惨な状況の中で、いつも身近に感じた被災者の気持ち。余りに月日が経ち過ぎているのだろうか。そういえば、奥尻島の津波、三陸はるか沖地震これらすべて、他所のできごとであった。私たちに降りかかる災害ではなかったのだ。この時わかったこと。被災者になって、初めて被災者の気持ちがわかったこと。</p> <p>末筆ですが、犠牲になられた多くの方にお悔やみ申し上げます。</p>
45	<p>私は、今回の被災地神戸市の北、三田市に住んでいる。</p> <p>前日（1月16日）までは大学入試センター試験の実施のため養成館に泊まり込んでいた。</p> <p>1月17日は、センター試験の片付けが予定されており、当然出勤の予定であった。</p> <p>午前5時47分、突然今まで経験のない揺れと、ガラスの割れるような音に目を覚まされ、それからは真っ暗の中でパニックに陥った。</p> <p>家がつぶれるのではないかと、とにかく、外へ出ることを考え、玄関の鍵を開けようとしたが家が揺れているので鍵もまともにはずれない。鍵を開けなが</p>

整理 番号	回 答 番 号
(45)	<p>ら、2階に寝ている息子を大声で下に来るよう呼びながら、ようやく玄関を開けることができ、外へ出た。</p> <p>この間、2～30秒もあったろうか。</p> <p>外に出たが近所の家庭は、何もなかったように静まり返っており、わが家だけが揺れたのではないかと思ったくらいである。</p> <p>これが地震直後のわが家の様子で、明るくなってから見ると、私の寝ていた30cm程度近くに、額が壊れて落ちており、まともに落ちていれば大けがをするところで、また、玄関付近は、花瓶の破片がこなごなになって散らかって、こんなところを怪我もせず裸足で歩いたものだと感心したものである。</p> <p>幸い、わが家は大きな被害も無く、壁やタイルに少し破損があった程度であった。</p> <p>それから後は、別居している母親や長男のことが気になり、電話をかける事になるのだが、これがなかなかつながらない。</p> <p>母親には6時半ごろつながったと思うが、長男には昼頃向こうからの電話で無事が確認された。姉、妹には、結局つながらず、午後3時頃母親のところに電話があったそうである。</p> <p>この間、大学教務課の関係者、身内に電話をかけっぱなしという状態であったが、後で聞くと誰もそうであったらしい。</p> <p>そうこうしているうちに電話が通じ、テレビを見てから神戸が壊滅したことを知ったのでした。</p> <p>とりあえず、身内の安全が確認されたことでそれからは、どうして大学に行くのか、という事を考え、わが家から自転車で約20分の部長宅へ向かうと、すでに8時過ぎには大学へ向かわれたとの事で、そこから近所の庶務課田村宅へ行き、明日水、おにぎりを持って行く事としたが、今回ほど、自動車運転免許がない事が、苛立たしく思ったことはなかった。</p> <p>翌日、大学には午後3時半ごろについたが（1時間のところを6時間かかった）、着いてみると教務課の部屋はごみの山（書類、ロッカー、本立てなどが散乱）で、避難者の誘導、遺体安置所、トイレの準備、などなど大変な騒ぎで、何から手伝ってよいものやら訳が分からなかった。とりあえず、食料がないと言う事で、家には、「とにかく食料がない。おにぎりをできるだけたくさん作れ」と伝え、田村君にはそれを運んでもらうよう依頼した。</p> <p>それから後の事は、記録もしていないため、今では断片的な事しか思い出せない。</p> <p>とにかく何かをし、寝て、また何かをする生活だったと思う。</p> <p>当初は3泊し4日目に帰宅し、翌日出勤のローテーションで、少ししてから2泊に切り替えた。</p> <p>健康な身体（自分には少々下半身に欠陥がある）が一番必要であると改めて感じたものである。</p> <p>この時期教務課は、入学試験の実施、後期定期試験、など、年度末の行事がめじろ押しで、特に入学試験は本学だけの問題ではないため、教務課長にとっては猫の手も借りたいほどの気持ちであったと思われる。</p> <p>しかし、私には、「学生部の代表として、震災対策に精励してくれ」との事で、教務一系の事を気にしながらのことであったが、できる事をやるしかな</p>

整理 番号	回 答 番 号
(45)	<p>い、の気持ちで主として対策本部に詰めており、本来の仕事は、川本係員に頼み、私は方向づけと、具体的な問題がある時に指示する程度で、川本君は完璧に立派に処理してくれた。改めて感謝するものである。</p> <p>10ヶ月たった今思えば、いろいろな人に会い、いろいろなできごとに会い、いろいろな事を考えさせられた。</p> <p>しかし、結局、我々は生きているのである。一人ではなく、みんなで生きている。</p> <p>わがままもあり、頼る事もある。それら全部が生きる事。私は、そう思う。</p> <p>このような大災害の結果が、このように小さい感想で終わるのは何だか申し訳ないように思うが、強く改めて感じたものである。</p>
47	<p>「平成7年1月17日午前5時46分」この生涯忘れることのできない受難の日…</p> <p>私の住む明石市東部では震源地に近かったため、壺に入って振り回されたサイコロのように縦横の揺れが激しく、思い起こしても身の毛のよだつ恐ろしい最悪の目覚めを強いられた。（後でわかったことだが明石市には地震計が設置されていなかった、よって本当の震度は不明。震災後設置された。）立ち上がれない、這って移動しようにも動けないまま布団をかぶって揺れの治まるのを待つしか術がなかった。</p> <p>「ドンドン」「ガチャガチャ」「ギシギシ」「誰だ！わが家を壊しに来たのは？」後半はこれ以上続けば「もうダメかもしれない」と考える間があるほど長い時間揺れた。</p> <p>揺れが治まった合間をぬって家族の無事を大声を出して確認、身は動けない。</p> <p>本棚の本・テレビが下半身にずっしり重い。懐中電灯は確かこのへん？、捜すのを止め夜明けを待つ。</p> <p>3段積みのタンスが前方へ崩れず、壁につけていたはずなのに壁側（後方）へ崩れ落ちている。？（妻の横には一番下の段が布団を押しつけ並んでいる）前方へ崩れていれば妻は大怪我（打ちどころ悪ければ・・・ゾ～ッ）、その他照明器具等の落下位置など々、不思議というか運よく全員怪我を免れた。（何より不幸中の幸い）</p> <p>家族全員二階に寝ていたので一階が心配、恐る々息子と一階探険を試みる。階段側壁が壊れて飛び出しチョッと降りれない。</p> <p>余震が来る、妻、娘が叫ぶ「どこにも行かないで！みんな一緒にここにいて！」しばらく様子を見る。「シ～ン」不気味な静けさ、二階窓越しに外を見る。お向かいの屋根に、その向こうの家にも瓦がない、アッあの遠くのお家は壊れている。</p> <p>こうして震災苦行が始まった。・・・</p> <p>どこから手をつければよいやら、とりあえず一部屋だけでも生活できる場所作りにと片づける事とするが、ガラス・陶器の破片多くスリッパを脱げない。妻は食器のガレキの山を前に嘆くことしきり。</p> <p>情けない、アッチもコッチもひび割れ、隙間だらけ、何とか捜し出した携帯ラジオが何よりの情報源、淡路東部を震源とする大きな地震発生の記事を聞き、東灘で阪神高速道路橋脚が倒壊しているとのこと、エッ大学は大丈夫かいな？</p> <p>発信不能の使えない電話のベルがなる。職場からの安否確認・出勤等追って</p>

整理 番号	回 答 番 号
(47)	<p>指示するとのこと、早々に無事を伝えて暫く、次々と親戚縁者よりの安否確認電話が入り一時間ばかりで再度電話不通。ウンともスンとも、どうなってんの？イライラ。</p> <p>ありあわせの食物で朝とも昼ともいえない冷たい食事らしきものをすませる。</p> <p>さて、我が町内（戸建24戸、150余世帯入りマンション1棟）には新興住宅地で比較的新しい家だったからか幸い救急車が来ることもなく、近所の人達と、瓦や、ブロックで通れなくなった道路と、側溝の片づけを始める。</p> <p>ありがたい電気が通じた。アレやコレや電気製品のスイッチを入れてみる。ラッキー！落下した照明器具2台と子供部屋のテレビデオ以外ほとんど機能的には大丈夫、掃除機が使えるのがうれしい。</p> <p>早速テレビにくぎづけ。惨劇（イヤイヤこれはノンフィクション）のすごさに声も出ず。</p> <p>布団と卓上コタツ以外照明器具も吊さない何も置かない部屋を一室確保し、次々とくる余震の中、奮えながら、隣の部屋のつけっ放しのテレビの明りを頼りに不安な夜を迎える。</p> <p>夕食では冷凍食品と缶詰と電子レンジが大活躍。</p> <p>明けて18日、水もガスも来そうにない。家族分担で鍋やヤカンを持って近くの給水所に飲料水配給の行列へ、その後は朝霧川は下水用の水汲みに、片付けと、水と食料買い出しの行列でおおかた一日が過ぎる。</p> <p>あいかわらず交通網はパニック状態、頼れるのは自分の足と自転車のみ、ウワサで学園都市方面は大丈夫らしいとの情報を頼りに息子と二人で食品買い出しのため自転車で1時間半、ウソのような平穏な風景、フトンを干している家々を眺め、「どうしてこんなに違うの？」やっとたどり着いたスーパー前には長蛇の列、息子に「ナチュラルウオーター、パン、バナナ、リンゴ、ポリウムのあるお菓子類、何でもいから比較的保存ができてそのまま食べれるものを買えるだけ買っとく」よう言い残し、私はサンマルクのパン屋（製造販売店）へまわる。やっぱり長蛇の列、「入場は10人ごと、バターロールなど詰め合わせ5個入りをお一人様5袋まで」と案内嬢。ありがたい、近所のスーパーでは「お一人様食品3品まで」だから苦労して来た甲斐があった。戦後生まれで配給など経験ないが、こういう感じだったのかな？</p> <p>19日 近隣の被害状況を見るため伊川谷方面へ出かける。あちこち古い民家が倒壊し、道路は歩道も車道もボコボコ、明石川に掛かる山陽新幹線架橋が落下、第二神明道路が洗濯板のようにボコボコ、避難所になるはずの松が丘小学校体育館損傷酷く危険につき使用不可。中学校に避難者集中。</p> <p>こうして見ると我が家は軽傷、家屋・家財の損傷は多少あったが、一家はなんとか無事だし、あらためて不幸中の幸いを知る。</p> <p>いつまでも公共交通機関の復興を待てどもこの調子では相当かかりそう、明石から中央突堤まで臨時に運航された船利用を考えたが、元町から徒歩ではとても通勤としては無理と判断。バイクが一番と近所のバイク屋を訪れるが、自転車もバイクもすべて売り切れ、加古川方面よりの入荷待ちとのこと、何でもいからと予約し連絡を待つこととなる。</p> <p>20日 大学より出勤要請の電話が入る。交通手段は自転車しかない。明石から約40kmはある。「お父さん大丈夫？」途中緑の公衆電話を見つけて連絡するようにと心配の見送りを尻目に激災地へペダルを踏む。</p> <p>国道2号線を東へ東へ舞子、垂水あたりまではスムーズに走れたが、塩屋の陸橋から西を見ると山陽塩屋の駅がない、前方を見ると釣り公園前のJR線で貨</p>

整理 番号	回 答 番 号
(47)	<p>物列車と、普通電車が脱線転覆、いよいよ激災地が近い。</p> <p>須磨駅周辺は倒壊家屋が道路を塞ぎ緊急車両優先で国道が通れない。JR須磨駅東側の脱線電車の間を自転車を抱えて線路横断、ラジオ関西東側では民家が燃えている。黒煙と埃で目が痛い。須磨区から長田区へかけては全てのものが壊れているといっても過言でないような状況で道路が亀裂と倒壊家屋で通行できず、たびたび自転車を抱えて歩く、まだあちこちで煙が上がり、火事だ々誰か来てと走りまわる女性を横目に心を鬼にペダルを踏む。</p> <p>兵庫区へはいる、神戸駅前から元町までアーケード街を通る、比較的無事な様子。元町南から京橋インターにかけて阪神高速の高架が落下して抜けたような青空が寒々しい。</p> <p>中央区では三宮駅方面は遠景の状況から混雑を予想、崩れ落ちたダイエービル東側より南へ、ヒビだらけの関電ビル前から東公園、川鉄工場横を抜けて脇の浜の立体交差点へ抜けたが、高架部が落下倒壊し通行不能のため2号線側へ上がれず、43号線の南側の倒壊家屋の瓦礫の中を自転車を抱え、やっと阪神大石駅の南側から都賀川沿いに2号線へ、JR六甲道西南側から桜口周辺までは焼け野原で、あちこちまだ煙がモヤモヤし、何とも言いようのない異臭の中、高德町の妻の実家に立ち寄り、無事確認と若干の食料と水筒を渡して灘区から東灘区へ、御影から住吉川、西岡本へと山手幹線沿いに民家の倒壊が目立ち、中でも田中町、JR本山駅南側の惨状は長田区のそれより悲惨に思えるくらいマンションの倒壊が多くこの辺の激震を物語った状態であった。</p> <p>やっと大学に着いたのは冬の4時頃夕暮れ時、明石から約4時間半の自転車と一部徒歩による最悪の出勤であった。</p> <p>入試実施本部を急きょ地震対策本部とした図書館自習室は、かろうじて発電機による電灯がとまり、映りの悪いポータブルテレビを一般情報源として、電話を中心とした学生の安否確認業務と、本省などの関係機関からの避難所業務連絡などに追われていた。</p> <p>震災当直は、まだこれといったルールもないまま、次々と昼夜関係なく届く救援物資の運搬整理が主な業務、深夜の仮眠中（たまたま玄関前のソファに寝ていた）見知らぬ女性に起こされ「化けて出たか？被災美人」とおもいきや、中年のご夫婦、車の渋滞で深夜になったが、九州からここに安置されている遺体を引き取りに来たとのこと。</p> <p>引き取るべき遺体は確認し、詰めている警察との手続きは終わったとのこと、棺の中がどろどろなので、せめて顔を拭いてやりたいのでこの時期貴重な水と知りつつお願いしたいとの申し出、タオル4～5枚に水を含ませ渡す。合掌されると背筋の凍る何ともヘンな気持ち。</p> <p>“ そういえば、多くの遺体を運んだ本学のトラックは、お祓いしたかしら？。”</p> <p>一度出勤すると2～3日止まる覚悟で出て来たが、当直2日目の晩11頃の妻からの電話でガクッ！「お父さん、我が家の上手にあるハゲ山の亀裂に、この雨で土壌が緩んで強い余震でもあれば、地滑りの恐れがあるので避難するようにと消防署から言われ、今から松が丘南小学校に避難する」と、不安げな話の中に涙が見える。</p> <p>「時間的余裕があるなら避難する際は、もう家には帰れないつもりで貴重品は勿論、車に積めるものは子供と協力して積み込んで避難するように」と指示し「明日は避難所に直接行くから」と不安な夜を過ごす。</p> <p>次の日は雨の中を自転車で一路明石に、ゴミ袋で応急に作ったカップでは中までビショビショ、ズボンが雨を含みペダルが重い、どの経路が最短か？</p> <p>神戸駅は楠公前から大開通りを西進し長田区役所前から山陽電鉄西代駅にか</p>

整理 番号	回 答 番 号
(47)	<p>けての南側は焼け野原、自衛隊の遺体？ 捜索活動が大掛かり、異臭が鼻を突く。</p> <p>やっと帰宅（避難所）で家族を見た時の安堵と共に、全身ヌレ鼠に気づき寒さを覚える。（今なら絶対カゼをひいて高熱でウ〜ウ〜いっているだろうな〜、精神緊張は何よりの予防薬？）</p> <p>避難所で支給された救援のオニギリの冷たいが暖かかった（ラップに姫路の山崎小学校3年〇〇と児童名が書いてあった）こと。</p> <p>ーこれが私の震災直後1週間を思いつくままの回想です。ー</p> <p>そのほか、悪夢の地震から一か月半が経過してようやく、自前の風呂が入れられるようになり普通に生活できることの喜びをかみしめたこと。</p> <p>余震の度に身を震わせ、貴重品をリュックに入れ肌身離さず持ち歩き、ポリタンクの水を入れ替えながら非常時に備える毎日を家族で4月まで続けたこと。</p> <p>応急措置のまま放置されたハゲ山をにらみながら、治水工事が完了する梅雨前まで2階での窮屈な生活を強いられたこと。</p> <p>その後暫く、バイクで通勤をしながら激災地の想像もつかない惨状現場を通り須磨区、長田区、灘区の瓦礫化した廃墟の街並を目の当たりにしながら（本当に震災前の観光都市神戸に復興できるのかな〜？）と思ったこと。等々断片的な思い出は山ほどもあるが、大方悲しい・苦しい思い出ばかりなので、この辺でやめる事とする。</p>
50	<p style="text-align: center;">「阪神・淡路大震災を振り返って」</p> <p>7.1.17 その夜いつものように床に就いたのが午前1時過ぎ、熟睡の只中であつたと思うが、突然“ドーン”ときて家中が揺れ出した。“大きい、そのうちおさまるだろう。”とじっと布団を被って潜り込んでいたが、いつまで立っても揺れ続ける。随分と長く感じ、いつもの地震ではないな思い、電灯をつけようとしたがつかない。懐中電灯で照らして‘あっ’と驚いた。箆笥の扉が開き、引き出しは今にも落ちそう。棚の中のものは総崩れ、机上の書物はすべて落下。子供が‘空に閃光が走った’という。階下に下りると花瓶は割れ、辺り一面ガラスの破片だらけ。ただ一つ運の強い花瓶が逆立ちしたまま助かっていた。</p> <p>やや、明るくなって外に出れば、道路にヒビが入りその延長線上の我が家の基礎石があちらこちらと欠けていた。取り敢えず家の内外を片づけ、6時過ぎに地下鉄は動いているかと駅に走ったが、駅員に聞いても様子がわからない。そのうち運行するような雰囲気もある。一旦、家に帰り、7時前に出勤するが、駅に着くと通勤客が皆Uターンしており、また帰路につく。</p> <p>阪神方面が気になり、西宮の身内へ電話を入れるが何度かけても話し中のブザーが鳴るばかりで通じず。8時過ぎ大学へ電話を入れ、幸いにも教務課長と通じる。課長曰く「前の高速道路が倒れている。」と。“傾いてはいるだろうが？”と、正直半信半疑であった。停電はしているが、水道もガスも平常通り、その時の私の家の被災程度が神戸市全域の被害状況だという思い以外はなかった。とにかく午前中は</p>

整理 番号	回 答 番 号
(50)	<p>様子を見ようと決めた。</p> <p>ラジオを聞くが、情報が定かでなく不安にかられる。上高丸の庶務課長宅へ連絡を取ると水も電気もガスも全てストップしているという。午前11時頃、復電しテレビの画面にくぎづけになる。改めて出勤しようとしたが、余震の続く中、家族に止められる。二階のベランダから見ると神戸方向の山越しに黒煙が立ち込めており、段々と大きくなっていく。家内は、兵庫駅付近の叔父宅が心配そう。</p> <p>その後、とにかく様子が知りたくて庶務課長宅へ車で駆けつけたが、宿舎の入口付近は崩れ、ひどい状況になっていた。課長はビールを水代わりにラーメンをこさえていた。</p> <p>夜になって断水しそうになり、慌てて近くの小学校へ給水に行くが長蛇の列。幸いにも断水は間もなく復旧した。</p> <p>7.1.18 早朝、出勤の準備をしている時、庶務課長から連絡を受ける。「局長と連絡を取った結果、‘身の安全を考えて出勤は無理しないように’」との由。</p> <p>断水の続く上高丸へ出かけ、力久君と共に飲料水を運ぶ。普段なら、20分のところが小1時間を要した。</p> <p>夜になって三村君の安否が未確認との連絡を受け、避難先と思われる所に片っ端から電話を入れ、漸く本人と話しが出来、先ずは一安心。</p> <p>連絡が取れなかった姉ともどうにか通じ、既に大阪へ避難していた。話しをするが、不安定な精神状態。聞けば、家は倒壊したが、家族全員無事だったと。すぐにも駆けつけるべきところ、遂に一度も手助け出来なかった。</p> <p>7.1.19 早朝、家内に炊けるだけのご飯を‘お握り’にしてもらい、飲料水 ～</p> <p>1.20 はスムーズに走れたので余震を気にしながら一目散に通り抜け、六甲山を下りた途端、町の様相が一変した。‘百聞は一見にしかず’道路は凸凹、電柱が道を遮り、立派な門柱のある家も無残な姿をとどめる。墓石は倒れて今にも石屋川へ落ちそう。啞然としながら大学に着く。正門は崩壊し、避難住民の方々であふれ、騒然とした雰囲気の中、対策本部に入る。地震発生当初から詰めている同僚が忙しく動き回り、殺気すら感ずる。しばし、その様子を見つめるばかり。一步出遅れたの感は免れなかった。次から次へと入ってくる情報が錯綜し、頭の整理が追いつかない。既に相当数の救援物資が運び込まれ、聞き及んでいた飲まず食わずの状態からは抜け出していた。学生の安否確認作業を必死に行う井上君ら、その間にも連絡のある学生の訃報。何とも厳しい状況の中に飛び込み、何をすべきか考える間もなく出来る事からやって行こうと行動に移る。</p> <p>遺体安置所へ行けば、毛布にくるまれたままのご遺体の余りの多さに人間の命はかくも弱いものかと目頭が熱くなった。漸く棺桶が届くが組み立てる道具がない。夕刻になってボランティアの人が組み立てる。亡くなられた外国研究員の方を棺桶に納めようとするが毛布がない。寝具の積もりで持ってきた私のお粗末な毛布と学長から頂いた洋服を使わせてもらった。</p> <p>これまで頑張ってきた職場の方々に感謝し、床に就くが眠れない夜を過ごした。</p>

整理 番号	回 答 内 容
(50)	<p>7.1.21 故人を荼毘に付す斎場を方々に当たり、相生市役所の好意で何とか確保することができた。午前4時起き、井口先生、藤原・岩永両君が、故人の親しかった田さんら中国関係者とともに長谷川さん運転のトラックで相生に向かう。帰路は渋滞というより立ち往生の状態、数十時間を要して大学へ戻ったのが22時頃、停電の中、灯りをともしてしめやかに通夜が営まれた。これほどに物悲しく、侘しい夜は、二度と経験したくない。</p> <p>この度の震災で「人命の尊さと助け合うことの大切さ」を実感し、この言葉を参列できなかった甥の門出のはなむけとした。我々は元々、「村」の中で助け合って生きてきた。ボランティア活動の原点は昔からあったのだと思い、こんなことも永く「街」に住んでいると忘れてしまうのかも知れない。避難住民の方々とかわりながら、職場の一員として自身に与えられた公務を遂行しているというより、お互い生活の場を同じくしている者が助け合っているという気持の方が強かったが、特に印象深いのは運輸省航海訓練所、広島大学、岡山大学並びに民間有志の方々による炊き出し支援である。</p> <p>あの寒い時期、普段と変わりなくしかも栄養豊かな食事を取れる幸せを誰もが感じたはずである。人間一人では生きていけないことをあらためて認識させられた。</p> <p>この外、振り返れば様々な事を思い起こす。</p> <p>庶務課長と三～四勤一休の24時間体制を取り、家路につくときは車の窓からいやでも目に入る倒壊家屋を見るたびに‘帰れる家’のあることの有り難さを噛み締めた。「とんだところにきたむら大地震」なんて余裕のあるピラも見たが、「なせば成る… ナセルはアラブの大統領（植木等）」の類の言いまわしには、言語を絶するほどの数多くの犠牲者を前にして、とても同感する気にはなれなかった。</p> <p>大学は知的優秀さを求めるところだろうが、学科改組以来様々な大学改革に携わってきて、その知性が知性であるが故に物事の進捗を遅らせ、時々邪魔ををすると思う時もある。‘ああでもない、こうでもない。’と云っている間に、時はどんどん過ぎていく。進歩的なところであるが、合理化経営を主眼とする会社等よりも案外保守的であるのかも知れない。遺体安置所となった教室の清めを行うに際して、宗教の問題にぶつかった。近くの灘高では僧籍を持つ先生が行ったという。思案の末、事務局長の明快な答えを得て宗教にこだわることなく実行することができた。</p> <p>3ヶ月間はあっという間に過ぎ、この間、夜中の午前2時頃急患に対応したこと、昼夜をかけて届けられた救援物資の受け取り、苦慮した当直対策と非常時の最中での職員組合との対応、神戸市との厳しいやり取り、震災発生が昼間であったならどうなっていたであろうか等々、課長を補佐しながら体は幾つあっても足らなかったが、まだまだ反省と想いはつきない。</p> <p>4月になり図書館の対策本部は閉鎖され、職員はそれぞれの持ち場で頑張ってきた。庶務課員としては、8月下旬の避難所解消で一区切りできたが、解体進徳丸関係の事後処理、膨大な災害記録の整理等山積みしている。ここに至って入院される方が出ており、震災との因果関係を憂えるが、自身は丈夫なのを幸いに努力するのみである。</p> <p>終わりに、延べ 1,200名を超える人材派遣と野積みせざるを得ない</p>

整理 番号	回 答 内 容
(50)	<p>ほどの救援物資に示されるように各大学等の能力の高さとその迅速な行動に感謝するとともに数多くのボランティアの方々に対し、中には名前も告げずに去られた方もおり謝辞は尽くせない。また、端なくも怒鳴ったりもした神戸市関係者とも互いの労を分かち合いたい。</p>
5 1	<p>姉の家は全壊・全焼だったが、家族は殆ど怪我もなく、姪は同居していた友人が亡くなったのに無傷で、物が少々壊れた位は、無事であれば何も言うことはありません。</p> <p>大学に出勤していれば炊き出しはあったし、友人は水や食料をもってきてくれたり、買い物をしてきてくれたり、今までの便利な生活から見れば大変でも、本当に有り難い事だったと思う。</p> <p>ただ、地震が直接の原因ではなくても、母の足を失った事だけは地震のせいだと恨めしく思う。</p>
5 2	<p>「もう起きなくては子供たちの弁当が間に合わない」と思いながらも、あったかい布団からなかなか抜け出れなくて、うとうとしていました。と突然、あの大きい強い揺れ、家全体が揺さぶられ、びっくりして飛び起き、ベッドの上で転んでしまいました。</p> <p>とっさに電気のスイッチを入れたがつかない。懐中電灯をつけ（こればかりはいつも枕元に置いていた）、携帯ラジオ（いつも通勤電車の中で聴いていた）をつけると、「近畿地方で地震があったもようだ、詳しい事は今のところ解らない」と伝えていた。でもこの時、自分の家が無事だったので、「大した事はないだろう、それにしても大きい揺れだったなあ」とのんきに夜が明けるのを家族一緒に（高2の娘は修学旅行で信州に行っていた）待っていた。</p> <p>1～2時間位して電気がつき、ラジオ・テレビから地震の様子が伝えられるが、大きな被害だとわかったのは昼頃になってからだと思う。</p> <p>とにかく出勤しなくてはと思い駅に向かうが、電車はストップしている。電話はつながらないし、イライラ・ウロウロしながら1日が過ぎた。</p> <p>次の日から、大学がどんな状態になっているのか解らないし、あせるばかりで、1日も早く交通網が復旧されることを待った。5日目ぐらいに明石港から、神戸港まで船が出航されると聞き、リュックに荷物を積み（山登りの服装スタイル）、しばらく帰れないからと家族に話し、次の日の朝4時過ぎに起き、明石港に向かった。寒くて寒くて、それでも1時間もすると長い列ができていた。（この日から、長時間並ぶこと、歩くことには慣れてしまった。）こうしてとにかく大学に出勤することが出来たのである。</p> <p>今回の地震で、私の行動は交通遮断によって、まったく身動きがとれなかった。又、初期に、医療従事者として、看護婦としても活躍することができなかった事については、あの混乱した状況の中では仕方がなかったことなのか、いまだに自問自答している。</p>
5 4	<p>地震にあったというので、心配した知人が電話や手紙をくれたのはうれしかった。特に外国からの思いがけないことだった。私は、今まで、外国の災害に対して無関心だったことをはずかしく思った。</p> <p>地震の後かたづけや工事のたびに、部屋の中の本、雑誌、資料をあちこち動かし、かなりのものが今だに行方不明である。まだまだ整理（後かたづけ）とさがしものは続く。整理中思ったことだが（自分の人生の残り時間等を考えると）ずいぶんと不用の資料等が出てきた。これらの資料等は適当に処分するつ</p>

整理 番号	回 答 内 容
(54)	<p>もりである。</p> <p>この地震で直接の被害にあったのは関西の一部であった。被害に会わなかった所では、いつもと変わらない生活があり、研究が続けられていると思うとアセった。せめて、最低限の研究は続けていこうと考えた。</p>
5 5	<p>当り前の生活の中でライフラインの有難さを痛感した。幸いにも自宅は被害もなく、現実的に地震の恐怖は忘れる事は出来ないが、被災された人々の心の痛みはなぐさめの言葉もなく、先日も被災した友人の御主人に会った時、余震があると「家内が泣きだす」と言う。又一度会いに行きたいと思う。</p> <p>又、音信不通だった人達からもお見舞いの電話や便り、お見舞いの品などを戴き有難かった。</p>
5 7	<p style="text-align: center;">阪神淡路大震災を経験して</p> <p>想像だにしなかったこの恐ろしい地震は、平成7年1月17日の午前5時46分に起きました。この時間ですから当然私は良い気持ちで寝ておりました。突然、ものすごい下からつき上げられるような激しい揺れに私は飛び起きましたが、立ってられないものですから、壁に手を当てて壁に寄りかかるようにしていました。まさに、船のロウリングのような揺れで、布団の上で踊りを踊るような状態になりました。寝ぼけていたからかもしれませんが、最初は地震というより、何かとてつもないことが、起きたのではないかという感じを受けました。それくらいすさまじい揺れであったと思います。筆筒が倒れ仏壇が転げ落ちてきました。私は東京の生まれで、仙台にも3年住んでいましたので東京と東北の地震は多く経験をしています。どうも東の方は横揺れの地震が多いような気がします。それに対して神戸の地震はドーンと下からつき上げるような感じで、まさに直下型の断層のずれによる地震ということでしょうか、何か地下で爆発したような感じです。あとで余震が頻発しましたが、いつもそういう感じで余震の度に恐怖を感じました。</p> <p>今から考えてみれば平成元年から2年間神戸大学に勤めていた時、2年の間にたった一回だけ地震に遭いましたが、お尻をつき上げるような感じで、神戸は地震は少ないが、もし、地震が来れば怖いと感じたことを思い出しました。不幸にもその予感当たってしまいました。今から考えてみれば、花崗岩の岩盤と埋立地のような軟弱地盤の組み合わせの上にある神戸市は、地震には危険な面を持つ都会だったということでしょうか。地震は20秒ほどで終わり、下を見ますと、寝ているはずの妻の布団の上に仏壇やいろいろのものが積み重なってましたので、あわててそれを取り除きますと寝ているはずの妻はいませんでした。隣の部屋でテレビを見ながらコーヒーを飲んでいたということですが、たまたま、私がまだ起きていなかった。本来私が座るテレビの正面に座っていた為助かりましたが、私が居れば、妻はいつも座っている位置に居るはずですので、倒れてきたガラス戸入りの本棚の下敷きになっていたと思われ。結果的には私も妻も怪我ひとつせず、奇跡と思われるぐらい運が良かったと思っています。ただし、物が落ちてきたり、倒れてきた場所は偶然常に妻の本来いる場所で、私が本来居るべき場所には何も落ちず、倒れてもこなかったということが、今もって問題として尾を引いております。</p> <p>さて、激しい揺れは20秒ほどで終わりましたが、なにしろ電気が止まってしまいましたので、真っ暗やみで、怪我はないかとか、懐中電灯はないかとか、どこかにラジオがあるはずだとか、わめきながらうろろするばかりでした。</p>

整理 番号	回 答 内 容
(57)	<p>日頃はあちこちで、目につくようなものが、いざとなるとなかなか見つからないものです。妻が、ロウソクならあるというので、あわてて、ガスが漏れていたらどうするんだと叫んだわけですが、若い人にはわかりにくいと思いますが、昔は停電すれば、ロウソクをつけるというのが、当たり前でしたので、年寄りはずいぶんロウソクをつけることになりかねません。都市ガスの時代は、むしろ、常日頃ロウソクは家から追放しておいた方が良くさえ思いました。これは今回の地震を経験してのまず初めの教訓だと思っています。教訓といえば、地震の時には、まず頭、それから手足を守るため、帽子、手袋、靴下の着用が大事だといわれていますが、まさにそのとうりだと思いました。特に、足は大事でスリッパでも良いと思います。とにかく床はガラスが散乱し、それから花瓶の水がこぼれたらしく水浸しの状態でした。足がやられますと動きが鈍くなり、いざという時逃げられないということもありますので、足を守るといことは何より大事だと思いました。</p> <p>一方外の方ですが、不気味な静寂に包まれて、ただ、遠くの方でワンワンという犬の声だけが心細そうに聞こえておりました。その時神戸の人は寝込みを襲われ、多勢の人が、すでに瓦礫の下に埋まっていたわけですが、たぶん皆何が起きたかわからない状況で、茫然としていたのではないかと思います。しばらくしてから、しだいに人の声が聞こえ始めざわめきが大きくなってきました。同じ棟の人達が大丈夫ですかと行って通り過ぎ、上の階の管理人さんの奥さんが顔を怪我をしましてと行って通り過ぎました。そのうち、うっすらと夜が明けてきますと、南側前方にもくもくという煙が上がっているのが見えまして、どうもあちこちで火の手が上がっているという感じでした。そうしているうちに近くに住んでいる学生課長さんと補佐の方が、訪ねてきて、どうしましょうかということになり、私はまず自分及び家族の安全を考え、大丈夫と思ったら大学へ駆けつけて下さいと申しました。少し、自己本位の考えかもしれませんが、一人でも死んだり、怪我をしたりすれば、どれほど周辺の人に負担をかけるかということを考えれば、軽はずみな行動はできないわけで、こういう緊急な事態では、お互い自らの安全をまず考えるということが、結果的に周りのためになるということであると考えました。このことは修羅場のような地震対策の仕事を以後長期間続けたわけですが、その期間中私の口癖になりました。そして、すぐに東京の親戚に電話を入れ、無事であることを伝えました。幸い、朝の早い時間でしたので電話はスムーズにつながり、親戚筋に無用な心配をかけずにすみました。</p> <p>さて、宿舎の南側前方の火の手は阪神電車の青木という駅のそばで盛んに燃えておりました。私の母親は、関東大震災の経験者で、地震の際の火事の恐ろしさを母親から繰り返し聞いておりましたので、用心深くその火の手を見ておりましたが、やがて、火も次第に納まってきたという感じになりましたので、1キロほど離れている大学に駆けつけることにしました。大学へは夢中で走って行きましたので、周囲の景色を見る余裕がなかったせいも、それほど家がつぶれて居るという感じがしませんでした。後で見てその被害にびっくり致しました。大学に着きますとすでに学長が来ておられました。学長は、地震が起きるとすぐに車を飛ばして大学へ駆けつけ、被害状況を視察し、それからいったん家に帰り、また出勤したということとその機敏な動きに驚きました。大学の被災状況は自分の目で見たのと、職員の報告をまとめてとりあえず文部省に報告したわけですが、最初はすこぶる呑気な情報を連絡してしまい、塀とか、地盤は破損して居るが、建物は大丈夫という内容でありました。しかし、段々調査が進むにつれそんな軽い被害ではなく大きな被害であることがしだいに分</p>

整理 番号	回 答 内 容
(57)	<p>かってきまして、愕然としたわけであります。</p> <p>神戸商船大学の被害としては海岸寄りの施設が大きな被害を被っており、練習船の船着き場である護岸が徹底的にやられ、岸壁は海に向かって崩落し、その辺に立って居る建物はすべて傾斜している状況でした。内陸側の建物は構造的には何とか使える状態でしたが、地盤はいたるところ沈下し、建物の継ぎ目は破損し、内部の設備はほとんど何らかの損傷を受け、設備については言わば全滅という有様でした。電気・ガス・水道といういわゆるライフラインはすべてアウトとなり、街では依然としてあちこちで火の手が上がっており、世の中しだいに騒然となってきて、ラジオの情報では死者の数が次第に増え、緊迫感が増してきたわけですが、それでも死者の数が1,000人を越えるなどはその時点ではどうてい思わなかったのですが、それが最終的には5,500人を越すという悲惨な状況になりました。そして、続いて1,000人を越す付近の住民が大学に続々と避難してきた為、そのお世話、あるいは遺体の収容等の、長期にわたる地獄の日々が始まったのです。</p> <p>私は、戦前の生まれですので、太平洋戦争の東京大空襲で焼き出され、疎開先ではカスリン台風によって、家もろとも家財を流されるという大きな災害を経験しています。ですから、戦後の日本は経済的にはいろいろ騒ぎはありましたが、最近あまりにも平和な世の中が続きましてので、こんな良い時代が長く続く方がむしろ不自然だという、漠然とした不安を感じていましたが、大地震に遭遇し、更に、東京でサリンという毒ガス事件が起きたことを聞いて、やはりそうかと感じています。地震については、予知の必要性が叫ばれ、お金と労力をかければ予知は可能だというようなことや、断層があるからあそこは危険だとか、普段地震がないからここは安全だとか、まことしやかに言われていますが、百年、千年の単位で見れば、日本のどこで地震が起きても不思議ではないし、どこでも地震はあると考えれば、すでに予知はされているわけで、その対策をいかにとるかということを考える方が大事だと思います。もちろん地質学的な地震の研究はできるだけ推進する必要はありますが、それだけに頼るのではなく一人一人が、地震は必ず来るという前提で、日頃から生活を考える必要があるのではないのでしょうか。</p> <p>サリン事件を考えてみても、日本人は危機というものに対して、少し甘えがあり、そして呑気きすぎたのではないのでしょうか。国の安全は他国に任せ、治安の良さは日本人の努力の結果というより、多分に日本という国の特殊性、閉鎖性にその要因があるとすれば、それに甘んじていたにすぎず、そういうことが、平和と治安をкаろうじて保ってきたという現実を目を向けるべきだと思います。いつまでもこの甘えの状態を続けていくわけにはいかないと思います。災害対策にしても、戦争中や戦争直後多くの犠牲者を出した恐ろしい大災害が続発しているにもかかわらず、戦争の混乱や経済的な騒ぎに隠れ、あまり話題にもなっていないので、若い人はよく知らないのではないのでしょうか。経済大国になり、他国には有り余る援助をしている日本はその意欲さえあればできることを怠ってきたのではないのでしょうか。</p> <p>更に、天が今度の地震を早朝という極めて幸運な時間に起こしてくれたのは、日本人にもう一度危機というものに対する考えを改めるよう警告を発し、反省のチャンスを与えてくれたのかもしれない。しかし、今度の阪神淡路大震災の反省が、いろいろ言われていますが、かんじんのこの地震がもし5時46分でなく、昼間の時間にあるいは夕方に起きていたらどのような被害が生じたか、そしてその対策はどうすべきかということについて、反省と分析がなされているようには感じられません。高速道路はその復旧に全力を挙げています</p>

整理 番号	回 答 内 容
(57)	<p>が、車間距離も短い上、時速 120キロ・150キロで飛ばすようなスピード違反が相も変わらず黙認され、新幹線は地震のないヨーロッパの国に対抗してますますスピードアップされています。そして今回の地震ではかなりつぶれたデパートなど人の大勢集まる繁華街の建物、それからなんと言っても今回の震災で最も多くの犠牲者を出した密集した木造建築など、この種の建物の耐震化・密集解消を人命重視の発想で、まず第一に、国家プロジェクトで始めなければならぬと思います。私は心配し過ぎでしょうか？</p>
59	<p style="text-align: center;">大震災を経験して</p> <p>今回の大地震を被害の大きかった東灘区の自宅で経験したが、未だにその時の様々な悪夢のような出来事が脳裏から離れない。今でも、寝ている時、仮設住宅を見る時、あちこちの空き地付近を通る時、工事中の国道43号線付近を通る時などでは、その時のことを思い出してしまう。そして、今でも時々大きな余震があるが、もう2度とこういう目には遭いたくないと思う。私自身の体験談として記してみた。</p> <p style="text-align: center;">1 日 目 = 1 日目は、時間をおってまとめてみた =</p> <p>○就寝中の突然の大地震 ドーンという音とともに、突然の激しい揺れが襲ってきた。私の頭に枕もとにあった子供用のタンスが倒れてきた。と同時に、タンスの引き出しや上に置いていた本・飾り物などが布団の上に飛ぶように落ちてきた。あまりの突然の大揺れに何がどうしたか分からないが大きな地震だとは分かった。そして、真っ暗の中を懐中電灯で照らすと家の中はどの部屋も目茶苦茶で、特に、リビングは食器類のほとんどは飛び出して割れてしまっており、暫くは只々呆然としていた。ともかく5人家族の中で私が頭にこぶができた以外は全員無事だったことと、建物はしっかりしていて大丈夫であったことに一応の安心を得た。しかし、これを機に、電気・ガス・水道・電話が全くダメ、そのうえ飲み水・食べ物なども手にできない地獄のような日が続くとは思わなかった。</p> <p>○大学は、学生寮は大丈夫か 私の住居の青木合同宿舎周辺の被害は凄く、いたるところの民家が全壊や半壊の状態であり、大学や学生寮はどうなのか心配になった。ただし、学生寮については、7時前頃に田中学寮会館係長から「学生寮と連絡を取り、寮生及び寮内建物に大きな被害なし」との連絡があったので少し安心していたが、大学の方は学生課長や事務局長の指示を得た方がよいただろうと7時半頃にすぐ近くの北青木合同宿舎を訪ねた。この宿舎も大丈夫で事務局長・学生課長ともに無事と伺った。局長からは「職員の皆さんが、家族の無事や家の片付けなどある程度の自分の家のことを優先し、大学へ行ける人から行くようお願いしたい。」との指示を得た。一度、我が宿舎に帰り、会計課長・施設課長・教務課長に局長からの指示を伝え、とにかく大学に行ってみることにし、8時頃に自転車で行った。</p> <p>養正館前まで来て、まず先に学生寮の様子をみることにした。途中、阪神電車の踏切を渡った山側は、電柱が道路を遮断するように倒れ、自動車は勿論のこと自転車さえ通れない状況で、しかたなく線路沿いを墓場の方へ行くと、何とビックリ！墓石のほとんどが倒れてしまっていた。</p>

整理 番号	回 答 内 容
(59)	<p>○学生寮の状況</p> <p>学生寮に着き、寮自治会役員とガードマンの松岡さんから、寮生及び建物・居室は大丈夫であると聞き多少はほっとしたが、もう既に何十人かの避難の人が押しかけてきており、とりあえず、食堂に入っていたいただいているとのことであった。この避難者については、この後増え続けたものの、よもや食堂が満杯になり、その後に軽食堂・娯楽室や補導厚生館2階の自習室・談話室・和室・会議室など亡くなった学生の遺体を仮安置した静養室以外の全ての部屋までが一杯になり、そのうえに補導厚生館の1階・2階の廊下までが埋まってしまうとは、この時点では思いもつかなかった。</p> <p>○学生部長が来寮、一緒に大学へ</p> <p>暫くして、学生部長が寮へ来られたので寮の状況等を報告した後、一緒に大学へ向かった。東門前の国道43号線は阪神高速道路の倒壊で深江交差点から東行きは通行止めになっていた。大学正門まで行くと、門が跡形もないくらいにバラバラになり、また、学生掲示板もバツクリ倒れており、大学の被害も相当だと思った。正門前には、7～8人の学生らしき若者が倒壊した建物から逃げてきたとあって、毛布に包まり石油ストーブにあたっていた。建物関係は見たところそんなに被害を受けているようには見えないので少しは安心したが、道路はあちこちで地割れができ、また、体育館・武道館付近の飾り石は凸凹になっており、やはり、地震のすごさが分かる。本部棟に着くと、既に、教務課川本君・会計課坂下君が来ていた（7時前頃に一度来て、8時30分頃再び来たとのこと）。</p> <p>一步事務所の中に入って、あまりの光景にしばらく声が出なかった。ロッカー・書庫類は倒れており、机は大きく動き机の上の書類や本などが散乱しているので歩く場所もないとりあえず、書類を踏みながら中へ入ったが、さて、何を・何から・どうしようかと思うものの片付けなどとてもする気になれない。ただし、この時も、これから休みなしの大変な日が毎日毎日続くことになるスタートだったとは思いつかなかったことだ。</p> <p>○地震対策の検討</p> <p>この後、学生課長・教務課長が、続いて事務局長も来られたので、事務局長・学生部長・教務課長・学生課長で取りあえずの打ち合わせが始まった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○教職員・学生の安否、家族の被災状況はどうか。 ○交通が遮断されており、教職員の出勤はどうするか。 ○当分は、授業をどうするか。（長引けば、試験はどうするか。） ○入学試験はどうするか。 ○避難民の受け入れをどうするか。 ○ともかく、対策本部を設置すべきではないか。 <p>など、検討されたようである。</p> <p>我々は少しずつ必要などころへ連絡を取ろうということにした（学内の電話は、昼過ぎまで使用できた）。私は、取り敢えず事務所内のまだ手のつけられていないこの現状を写真に撮ることにした。</p> <p>○最初に大学へ来た人は誰だろう</p> <p>大学の状況を最初に見た人は誰で、どういう状況であったかなどを知りたかったため、守衛室のガードマン・山部さんに聞いてみた。</p> <p>最初に大学に来た人は、学長であったと思う。学長が来られたのは6時30分頃であった。続いて、牧野施設課長が、少し遅れて井上会計課長が来られたように思う。7時前頃には三宅先生の顔も見た。7時頃に川本さん、坂下さんが、その後岡本さんが次々に来られたように思う。なお、6時頃には、</p>

整理 番号	回 答 内 容
(59)	<p>近隣住民の人が2～3世帯の10人ぐらいが避難して来ておられた。また、6時30分頃には、10人ぐらいの寮生が学内の様子を見に来ていた。その後、避難して来た学生も含め7時頃には20人近い人が集まっていたと思う。また、私ごとであるが、守衛室で仮眠中に地震が起こり、ロッカーが足の上に倒れてきて右足の太腿を痛めてしまった。玄関から出ようと思ったが、ドアが開かなくてなんとか窓から這い出た。丁度第3号館で泊っていた7～8人の学生が正門付近に集まって来ていたので、皆に手伝ってもらい懐中電灯を手に3班に分かれて学内を見回った。なお、怪我をした学生がいたので、病院へ行くよう指示した。</p> <p>○後日に、三宅教授から話を伺った話 自分6時過ぎには大学へ来た。地震後は真っ暗であり、懐中電灯を持って宿舎を6時頃出た。大学に来た時は正門には誰もいなく、付近に大学院生が2～3人いたので最初に3号館へ行った。大学には7時前までの約1時間いたけれど、教職員に会ったのは、グランド・係船池の方を見に行った時、施設課長と会い、その後に学長とも出会った。教職員で自分が出会ったのはこの二人だけであった。</p> <p>○その後の出来事 ・避難民の受入要請 9時30分過ぎ、神戸市職員（女性）が訪ねてこられ、避難民の受け入れについての要請があり、学生寮・体育館を受け入れ場所とすることとした。（ただし、避難の人を体育館に入れる際になって、武道館の方がこじんまりしており畳もあるということで、先に武道館へ入れることとした。）</p> <p>・学内視察 10時頃だったか、学生課長と学内を見て廻った。あちこちに亀裂が走っており、大きな地割れもたくさんあった。特に運動場から海岸寄りには被害も大きく、運動場は、一面に液状化現象となっており、そのうえあちこちに大きな地割れ・亀裂ができ、徐々に海側に崩れていくのではないかと思われた。防波堤を一步海側に出て、余りの惨状に暫く呆然と立ちつくしてしまった。海技実習センターは大きく傾き、海技実習センター前の岸壁は1～1.5mぐらい陥没しており、また、西側の艇庫前の岸壁も同様に大きく陥没していた。そして、深江丸の接岸岸壁及び進徳丸周辺を見て、これまたびっくりしてしまった。この辺りは2mぐらいが陥没し、特に深江丸接岸岸壁の先端部分は今にも海に崩れ落ちそうであった。進徳丸周辺はこれまたひどく、南側防波堤付近では大きな地割れがいくつもできて、人間がすっぽり入ってしまうほどの地割れや穴も開いており、防波堤の一部は大きく海にせり出していた。また、進徳丸も東側に傾いているではないか、多分ダメであろうと思われる。外へも出てみた。既に耳にしていた阪神高速道路の落下した手前付近まで行って見たが、さすがにびっくりした。誰が想像したであろう阪神高速道路のまさかの落下、それも大きな橋脚が中の鉄線をむき出しにして何本も横倒しになっている。乗用車やトラックの何台もが叩きつけられており、荷物の荷物などが散乱しているところもある。車の中には、ひょっとして、まだ人がいるのではないかと思われた。既に警察官が何十人と来ており、走ってくる車の交通整理などを行っていた。</p> <p>・地震の対策本部を図書館自習室に設置 朝早く視察に来られ、一度支度に戻られていた学長、会計課長、施設課長が再度来られ、すぐ学長・事務局長・学生部長・各課長で打ち合わせが始まり、地震対策本部を図書館1階自習室に設置することとなった。ここは大学</p>

整理 番号	回 答 内 容
(59)	<p>入試センター試験でも実施本部とした場所で皆が集まりやすく、また、入試用の臨時の電話が、その後に学内電話が不通となったことから大活躍した。我々も数日間は本部棟でなく、この対策本部室が仕事場となった</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生死亡の知らせ <p>11時頃だったか。ある学生が「友人の春藤量隆学生（3年BN）が近くのアパートでなくなったので何とかしてほしい」と訴えてきたので、学生部長・学生課長・私と学生3人でリヤカーを引っ張ってアパートまで行き、遺体を学生寮の静養室に安置した。</p> <p>続いて、12時頃であったであろうか、三好教授から「阪神アパートで大学院生の神田徹学生と中国からの外国人研究者・高戦朝さんの奥さんが亡くなった。誰かすぐ行ってほしい」と連絡があったので、早速、学生課長と二人で自転車で行ってみた。青木駅南側の43号線沿いにある阪神アパートは結構大きなアパートであるが、1階が全て潰れ、2階建が平家のようになっていた。そして、そこには本学の学生を含め10人ぐらいの人達が救助活動をしている姿があった。この阪神アパートには、本学学生の15人ぐらいが住んでいたはずなので、他の学生はどうであったであろうか心配である。そこへ、また三好教授から「亡くなった神田学生と中国からの外国人研究者・高さんの奥さんの遺体は近くのお寺に運んでもらっているので、よろしく頼む」と依頼された。そして、そこへ大学院生の蔣学生が「この阪神アパートに住んでいた武力平さんが死にました。甲南病院に運ばれたのですが、先程、亡くなったそうです。よろしく願います。」と訴えてきた。エー！また死亡者が出た！！と思わず重い気持ちになった。</p> <p>なお、この阪神アパートの目の前では、青木市場・商店街の40～50軒が燃えるという大きな火事があり、まだこの時間では数軒くすぶっていた。</p> ・学生の安否確認、寮生以外は数人のみ確認。1日目の学生・研究者の死亡者の連絡は4名。 <p>学生の安否確認については、2日目からは本格的に始めたが、地震当日は寮生が380名のうち、連休であったためか地震のあった時に寮にいた者は約250名であり、まず、この在寮していた寮生と実家へ帰省していた残りの者の殆どが大丈夫であろうことが最初に分かり、少しほっとした。しかし、寮生以外は、下宿が倒壊した下宿生や大学の様子を見に来た学生などが何人か無事である旨を伝えただけであり、電話がダメ・郵便もダメ・交通機関もダメの現状では、学生全員の安否確認はちょっとやそつとではできないと思った。なお、1日目に死亡の連絡のあった学生は、下宿していた大学院の神田徹学生と3年生の春藤量隆学生の2人であり、外国人研究者・武力平さん、外国人研究者・高戦朝さんの奥さんの死亡を合わせるとこの時点での大学関係者の死亡は4人であった。もう、これ以上学生の悲報を聞くことがなければよいがと祈る気持ちであった。</p> <p>○その後の学生寮の避難者の受け入れ状況</p> <p>当初、学生寮の避難民の受け入れ状況を寮自治会に聞くと「食堂はほぼ一杯であり娯楽室や軽食堂にも入れる予定であるが、水やトイレが心配である。」とのことであったので、学生課長とその後の寮の様子を見に行くこととした。</p> <p>この頃、避難者の人は300人ぐらいいたかと思うが食堂と娯楽室にほぼ一杯という状態になっており、この上まだ次々と避難者がみえていた。寮生が避難者から「寒いので何かないか」と訪ねられたと訴えてきたので、娯楽室の隣の倉庫から予備の毛布を出して貸すことにし、倉庫の毛布約200枚ぐら</p>

整理 番号	回 答 内 容
(59)	<p>いを全部貸し与えることとした。このときも、まさか廊下にまではみ出るほどの避難者が来るとは考えもしなかった。また、飲み水とトイレが心配であったが、最初のうちは貯水タンクからの水があったので夕方ぐらいまでは大丈夫で、その頃には寮生がポリバケツなどに水をためてくれていた。こういう面を含み避難者の世話に関しては、寮自治会は非常によく動いていた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生寮の被害状況 <ul style="list-style-type: none"> この後、寮内の被害状況を見て回った。北寮玄関入り口の石段は結構大きな段差ができており、北寮の建物に影響していないか気になる。風呂の大きな煙突はすぐにも倒さないと大きい余震がくると危ない。南の道路側のブロック塀は随分崩れていた。補導厚生館も室内壁や廊下のあちこちに結構大きなひび割れができていた。一見、被害はほとんどないように見えるものの専門家が見ればまだまだたくさんあるだろうと思われる。 ○職員の安否確認はかどらず・電話通じない、その後に、学内ダイヤルイン電話も不通に <ul style="list-style-type: none"> 局長から、各課なりに職員の様子を聞き、出勤できるようであれば道中気をつけて出勤するよう伝えるよう指示があった。ただ、混線のため電話がなかなか通じず、連絡が取れた者は僅かの人だけだったと思う。そして、昼過ぎの何時頃からだったのだろうか、学内電話（ダイヤルイン）が使用できなくなり、使用できるのは、特別対策本部の入試用に設置していた電話だけとなってしまい、各方面とのやり取りが今まで以上に必要な時期だけに非常に困ってしまった。 ・武道館の避難者溢れる・・体育館へ誘導 <ul style="list-style-type: none"> 夕方近くには、武道館に入れていた避難者がほぼ400人ぐらいでいっぱいになり、体育館にも入れることにした。武道館・体育館ともに非常に寒く・床はとても冷たいことから、課外活動共用施設の西側から入ったすぐの部屋に、柔道畳の下に敷くウレタンマットがたくさんあるので避難者に貸すことにした。しかし、全員には渡らないために、逆に「嬉しい話をしておきながら、当たらなかった者にはどうしてくれるんや」と怒鳴られてしまった。避難者の数は、その後600人近くになっていた。 ・トイレが詰まる。プールのトイレと水の利用を <ul style="list-style-type: none"> 体育館のトイレはすぐに詰まってしまったので大変困ったが、プールのトイレを利用してもらい、プールの水を汲んで流してもらうことにした。これには、ポリバケツを20～30も用意し全てのバケツに水を汲んだが、結構重労働だった。結局、これは大変よい考えであったと思う。なお、詰まった体育館トイレの後処理はこれまた大変だった。 ○学生が飲み水を汲んでくれた。避難者に水の提供を。 <ul style="list-style-type: none"> 大学院の原子動力学専攻の学生から「避難住民の方が水に困っておられると思うが、4号館前の水槽タンクから流れ出ている水をたくさん汲んでいるので車で運んでほしい。」との申し出があり、坂下君にトラックを運転してもらい、私・清水さんなど数人で4号館西側へ行った。そこには、大学院の原子動力学専攻の学生が5～6人で、大きなポリバケツの中に大きなナイロン袋を用意し、既に7～8個が一杯となっていた。それをトラックで運び、本部に2個置いた後は、避難者がいる武道館玄関と体育館玄関に置くことにした。玄関にはテーブルを設置し、その上に給水器を2台ずつ置き、コップを入れたザルも置いた。その周辺には、飲み水の表示などして、避難の人が困らないよう配慮をした。これで、2～3日の飲み水は何とかなるであろう。しかし、院生もよく気が付いてくれたものだ。

整理 番号	回 答 内 容
(59)	<p>○対策本部にストーブを、しかし、大きな余震があったらどうする！ 今日は、避難者がたくさんいるので泊まれそうな人はこの対策本部で止まろうということになった。ただ、夕方から非常に寒くなってきたので、ストーブで暖をとろうと2台用意し火をつけた。しかし、大きな余震がきたら危ないということで消してしまった。ところが薄暗くなりかけた頃からはすごく冷え込んできたので、1台だけでもつけることにした。この寒さでは、また、特に真っ暗の部屋ではとても居れるような状態ではなかった。</p> <p>○武道館・体育館は暗い、寒い……何とか灯りをつけてあげたい！ 避難者のいる武道館・体育館は真っ暗なうえ、寒いだろうな！と分かっているけどどうしようもないと思っていたが、三好教授が「少し小さいが発電機を探してきたので、これで少しでも避難者の方の気持ちが安らぐのではないか。」と言われ、コードとライトとともに武道館玄関口に運び発電機を動かした。真っ暗な武道館と体育館に、灯りがつき避難者から「オ・オー！」と歓声があがった。当然我々も「ヤッター」という気持ちになった。余り明るくはなかったが、真っ暗だった館内がほんのり明るくなり、少し暖かい感じがしてきた。ただ、燃料のガソリンがあまりなかったので、22時過ぎには発電機は止まった。しかし、恐怖に怯え、不安な気持ちのうえに寒く・真っ暗だった部屋にほんのりでも灯りがついたことはずいぶん喜んでもらえたと思う。</p> <p>○23時過ぎ、神田学生の身内・知人を無量寺へ案内……遺体と対面 23時頃、亡くなった神田学生の身内・知人の4人から、神田学生に会いたいのので案内してもらえないかと申し出があったので、真っ暗な道を自転車で無量寺まで案内した。道中、辺りはシーンとしており、異様な雰囲気であった。お寺の遺体安置の場所に入るとロウソクの火だけの暗い中に遺体が10体ぐらいあり、側には身内の人10数人が付添っているが妙にシーンとしている。遺体の間を通り神田学生のところに案内して顔にかぶせてあった布を取ったところ、神田学生の彼女らしい人がものすごい声で『トオル！トオル！なんで死んだの！トオル！トオル！』と何回も泣き叫び、静かだったお堂の中が反響して一時騒然とした状態となった。これには他に付き添っていた人もビックリしたり、もらい泣きする人もいた。側にいて懐中電灯で照らしてあげていた私自身も何とも言えない気持ちであった。暫くして、他の人に迷惑でもあり、また、御両親は茨城県から明日見えるということであり、取りあえず住職さんに挨拶して大学へ帰った。</p> <p>○第1日目、12人が泊まることとなる・・布団・毛布1枚もなし 20時過ぎ頃、対策本部室に学生部長・教務課長・学生課長・施設課長・岩坂・清水・赤松に、踊松宿舎の5人（岡本、灘野、川本、坂下、大石章代）の11人が泊まることになったが、布団や毛布は1枚もなく、ソファの上で寝るかストーブの側の椅子に座りながら寝るかテーブルの上で寝るか椅子を並べて寝るなどそれぞれ好きなように寝ることとなった。部屋の中はストーブ1台だけの明かりだけであったが、外の焚き火の明かりも見え11人も居るから寂しいという感じはなかった。ストーブでお湯を沸かし、部屋から持ってきたコーヒーやお茶を飲みながら24時頃まで懇談していたが、一人二人うつらうつら寝る人が出てきた。皆がさあ寝ようかと寝る場所を捜すが、布団も毛布もなくそのうえ余りにも寒いので、ストーブの側で椅子に座ったまま寝た人5～6人、近くのソファで寝た人5～6人、机の上で寝た人1人であった。しかし、いすに座ったままの格好では寝れるわけなく、近くにあったソファに寝てみたが、これまた、寒いととても眠れなく、結局、ま</p>

整理 番号	回 答 内 容
(59)	<p>たストーブの側の椅子に座りうたた寝状態で朝まで寝た。(実際は、お尻が痛い・首が痛い・肩がこるとかで耐えず体を少しずつ動かさせていたので、殆ど寝れなかった。)ところで、朝は朝で、5時ぐらいには避難民の人から用事で起こされることになってしまったが、これから長い長い震災後の辛い毎日が続くのに、何と長〜い1日であったことか。</p> <p style="text-align: center;">2日目以降 = 2日目以降は、思い出すまま記した=</p> <p>○武 力平さんの遺体の引き取り 学長から、武 力平さんの遺体を甲南病院へ引き取りへ行ってほしいと依頼され、田中学寮・会館係長にトラックの運転をお願いし、地震で奥さんを亡くされた外国人研究者の高戦朝さんと友人二人の乗った乗用車が同行するという形で出発した。国道2号線は大渋滞のため、甲南病院へは北や西方向に抜け道に行くが、あちこちで家が道路に崩れてきており、バックしたり・ぎりぎり通り抜けたりしながらいった。病院は大勢の人で大混雑状態であった。何とか、看護婦さんに尋ねたところ時間はかかったが、亡くなったので灘高校へ運ばれたとのことで、早速向かうこととした。遺体の安置されている灘高校体育館へ着くと、100体以上の遺体が安置され、大勢の関係者でいっぱい状況を見てビックリしてしまった。受付で手続きを済ませ、遺体を運ぼうと4人で畳ごと持ち上げたが、とても重たかった。</p> <p>○神田徹学生と高戦朝さんの奥さんの遺体の引き取り 灘高校を出る頃に、本学が遺体安置所になった情報が入ったが、高さんから「無量寺へ安置されている妻も大学へ運んでほしい。」と懇願され、途中、青木の無量寺へ寄ることにした。そして、高戦朝さんの奥さんの遺体と神田徹学生の遺体を引き取り、計3体を本学のS12号室へ安置したが、これには高さんから随分お礼の挨拶をいただいた。しかし、誰でも初めてとはいえ、死人を見る・触るといことはいい気持ちのものではなく、二度と経験したくない。もうイヤだという気持ちになった。</p> <p>○学生寮からも遺体搬送 暫くして、私は行けなかったが、学生寮に安置している春藤学生の遺体も大学へ運ぶべきだということになり、また、田中係長に行ってもらった。ところが、学生寮に避難していた方から「亡くなったばかりの年寄りと一緒に運んでほしい」と頼まれ、結局、春藤学生とその他2体の計3体を大学へ運ぶこととなり、何か、遺体の搬送屋のようであった。</p> <p>○3BN土谷孝博学生の遺体搜索 3日目の昼前頃に、甲南市場近くの3階建アパートの1階に住んでいた土谷孝博学生がまだアパートの中に埋まっているようだというので、寮生が10人ぐらいでハンマー・カナヅチ・スコップなどの道具を持ち、中へ入ろうと試みていた。この辺りは、地震後に大火事があり、このアパートの隣から30〜40軒が焼けてしまっていた。夕方からは、自衛隊の応援を頼み、結果、夜中遅くに遺体を運びだせた。そして、遺体は遺体安置所である東灘区役所まで運び、検死を済ませて大学に帰ってきたのは4日目の02時頃であっただろうか。この作業には、学生とともに森田教授・学生課長・私・井上厚生係長が交代であったが、最後に遺体の面倒をみた森田教授と井上係長には、寒い中を大変ご苦労さまでしたと頭が下がった。</p>

整理 番号	回 答 内 容
(59)	<p>○アルジェリア国マスキリ・マジット研究生の死亡の情報 5日目に、アルジェリア国からの研究生のマスキリ・マジットさんが亡くなったとの連絡が入った。前々日ぐらいから連絡が取れないと心配していたが、やはりダメだった。マスキリさんは10月に来日したばかりであり、来日に際し色々世話をしてくれた中国人と同居していてこの震災に遭い、二人とも亡くなったとのことであるが、本当に気の毒としか言いようがない。学生課の方ではマスキリさんのことはよくわからないので、この後の処理については教務課と指導教官・緒方教授及び学術交流委員長・森田教授が当たってくれることになったが、遺体の処理の関係から、東京のアルジェリア大使館との連絡は私が取ることとなった。まず、神戸で面倒見ていただいているイスラム文化センター及び神戸モスリムモスク協会と連絡の上、アルジェリア大使館に相談し、遺体を茶毘に付すか母国へ搬送するかなどを相談した。結果、東京から大使館員が来神することになり、後は教務課の方へ任せることとなったが、宗教・国情などが異なることからの難しさを感じた。</p> <p>○山内傑登学生の遺体捜索、7日目に見つかる 地震後、5日目を迎え、殆どの学生の安否が確認でき、あと20～30人ぐらいになっていたが、この頃、深江の2階建て木造アパート『すみれ荘』の1階に住んでいた山内傑登学生の安否が分からないということであった。6日目には愛媛県新居浜市からお父さん・お兄さん・叔父さんが見えられたことから、指導教官の西川教授と研究室の内田助教授が一緒になって、雨の中を自転車であちこちの遺体安置所を回られたが分からなかったため、西川教授・内田助教授と私の3人が管理人さんのところへ行き相談した。しかし、よくわからないとのことなので、7日目の01時頃になって、西川教授と一緒に本学テニスコートに救助のための本部として駐留していた自衛隊に『すみれ荘』を捜索してくれるように頼み込んだ。早速、翌朝9時前頃から自衛隊と佐世保市レスキューが捜索してくれた結果、10時半頃に遺体で見つかり、六甲アイランドの遺体安置所に運ばれたが、状況を伺えば、建物の梁が直撃しており即死であったであろうということであった。7日目では、学生の安否もほぼ全員が確認できたので、これ以上の犠牲者はないと思うものの何とも言えない気持ちであった。</p> <p>○春藤学生の遺族6人、早朝に遺体と対面 3日目の早朝04時過ぎ、春藤学生のご両親を含め6人が徳島市から夜行便フェリーで来られた。早速、遺体と対面したいということで遺体安置所に案内した。辺りはまだ暗く、懐中電灯を持ち、春藤学生の遺体の場所に案内したところ、周りはシーンとしていたところへお母さんが「量隆！こんな姿になってしまって！もう1日家にいてくれたらこんな目に遭わなくて済んだのに」と腕をさすりながら約30分ほど泣き叫んでおられた。この間、私は懐中電灯で春藤学生の顔を照らしていたが、とても居たたまれなかった。この後、遺族の方は、検死が終えると遺体をワゴン車に積み大混雑の道路を急いで帰っていかれた。</p> <p>○寮の北側の国道付近で火災発生 2日目の夜に、学生寮の有田寮自治会長が「寮の北側の国道付近で火災が発生しており、国道沿いにガソリンスタンドがあるので、爆発すれば寮も危険である」と訴えてきたので、会計課長と田中学寮・会館係長の3人で火災</p>

整理 番号	回 答 内 容
(59)	<p>現場まで様子を見に行くことにした。火事の現場は国道より更に40～50mほど北で民家2軒が勢いよく燃え上がっており、たくさんの消防士も消火というより、近隣に燃え移らないように苦労していた。国道までは延焼しないだろうとは思ったが、国道沿いは確かにガソリンスタンドが多く、長田区のように大火となれば大変なことになるなどと思った。国道2号線付近も被害状況は目も当てられないぐらいにひどく、何か半分以上の家が倒壊しているといった状況であった。また、国道は大渋滞で東行きも西行きも殆ど動かないという状態であった。</p> <p>○寮の封鎖 2日目の夕方、有田寮自治会長から「寮に避難住民を受け入れ、我々寮自治会役員は避難住民の面倒はできる範囲で面倒見るが、寮生については食物はなく責任はもてないので寮棟の閉鎖を2～3日後に行いたいのがよろしいか。そして、できれば19日の朝8時からプール跡地において説明会を行いたいので、よろしければ学生部長にも来ていただけないか」の申し出があった。学生部長は、学長とも相談の結果了解し、翌19日08:00に、有田寮自治会長及び学生部長から説明を行い、22日をもって寮棟の閉鎖を実施した。</p> <p>○寮生の近隣住民への救助活動及び3月末までの避難住民の世話等のボランティア活動 寮生が、地震直後に救助隊を編成し倒壊した付近の家屋から100人以上の住民を救助のうえ負傷者の搬送を行うなどの活躍したことが2月16日の読売新聞の報道により有名になったが、正直言って、教職員はこの救助活動については殆ど知らなかった。また、なぜか寮生もこのことについての報告はしてくれなかった。とは言うものの、地震当日から3月末まで、寮生は避難住民の世話を一手に引き受けてくれ、何かにつけて大変よくやってくれたと思う。</p> <p>《後記》 地震発生時から、数日間における私の身の回りに関連することを思い出すままに記してみたが、この間にも毎日のように、避難住民との対応・学生（特に寮生が多かった）との対応・他大学からの物資の対応・当直体制での対応など時間を問わず非常にたくさんの業務があり、殆どの人が休みも返上して頑張っていた。 ただ、反省として思われることは、対策本部での業務などに追われ、自宅・下宿が被害に遭った学生や学生寮の学生の対応などにもっと時間をかけてやらなければならないかと思うこと。また、学生寮の寮生には、避難住民の世話を長い間よくやってくれたにもかかわらず、余りというか何もしてやれなかったことである。 なお、このような災害時の対応について、本学を始め各大学とも満足というような対策や規程整備はできていなかったと思われ、早急に災害時対応及び規程見直し並びに教職員・学生の連絡態勢などの検討を強く感じた。</p>
60	<p>阪神淡路大震災による被害の概要と課題</p> <p>☆概況 平成7年1月17日午前5時46分に発生した兵庫県南部地震は神戸商船大学にも大きな被害をもたらした。</p>

整理 番号	回 答 内 容
(60)	<p>大学の敷地南側（海岸側）は埋立地であることから土の液状化による地盤沈下、地割れ、陥没が生じ敷地内各所に噴砂現象が見られた。</p> <p>護岸、岸壁は海側に大きく競りだし倒壊した。更に繋船池周辺の艇庫、海技実習棟等の建物及び陸揚げされたかつての練習船進徳丸も傾斜した。</p> <p>液状化の影響は敷地北側にも見られ直接基礎の建物は屋外階段の一段程（20cm）沈下が確認された。しかしながら建物は不同沈下することなく沈下後も原形の鉛直度を保っており、壁等にひび割れはあるものの構造的に大きな異常は見られなかった。</p> <p>屋外に設置されていた共同溝、雨水樹等は見かけの比重が小さいことから液状化による浮き上がり現象によるものか判然としないが、廻りの地盤とに段差が見られた。</p> <p>共同溝は建物との接合部において破損した箇所が数カ所確認されたが、コンクリートが圧壊された状態になっており、地震による上下動、水平動の影響が大きい液状化による浮き上りも関連しているのではないかと思われる。</p> <p>☆個別被害の概況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・建物被害 <ul style="list-style-type: none"> P C床版の移動……………P C床版は下部の現場打ちコンクリートの梁に接続されていたが、ファスナーが破断し5cm程ずれたもののP C床版自体には異常は認められなかった。 EXP. J 部の破損……………3階建て建物で5cm程度のクリアランスを取っていたが地震動による衝突でパラペット等が圧壊した。 クラックの発生……………壁、柱等にクラックが発生し一部のモルタル、タイルが脱落した。 ガラスの破損……………主にハメコロシまどが破損したが一部家具等の転倒によりドア、引き違い窓のガラスも破損した。 床仕上げ材の汚損……………薬品棚が転倒し薬品が床にこぼれ出し、実験台の移動により破断した給排水管から漏水し床一面にあふれだし床仕上げ材を汚損した。 ・設備の被害 <ul style="list-style-type: none"> タンクの破損……………受水槽の基礎が傾斜し、接続配管及びタンクが破損した。 冷却塔の破損……………止めつけボルトが破断し冷却塔が破損した。 ファンコイルユニットの……………上記同様ボルトが破断しファンコイルユニットが移動した。 洗面流しの破損……………洗面流し、化粧鏡が脱落破損した。 給排水管の破損……………実験台の移動により取り付けられていた給排水管が破断した。又、土中埋設の給排水管も地盤の沈下、地割れにより破断した。 ガス管の破損……………給排水管同様土中埋設管等が破損しガス漏れが生じた。 ボイラの破損……………止めつけボルトが破断しボイラが破損した。 照明器具の破損……………パイプペンダント型の照明器具が脱落破損した。 変圧器等の破損……………止めつけボルトが破断し変圧器、盤等が移動し破損した。 電話交換機の……………停電によりバッテリーが放電し機能停止となった（自家発電装置なし）。

整理 番号	回 答 内 容
(60)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 工作物の被害 <ul style="list-style-type: none"> 煙突の破損……………コンクリート製煙突が中間部で破断し転倒の危険が生じた。 塀の破損……………コンクリートブロック塀等が転倒破損。 正門の破損……………石造の正門が転倒破損。 金網フェンスの破損……………地盤の沈下により傾斜破損した。 ダッグアウトの破損……………地盤の沈下により傾斜破損した。 地中水槽の破損……………R I 処理槽、実験廃水処理が不同沈下により破損した。 ・ 土地の被害 <ul style="list-style-type: none"> テニスコート、グラウンドは地盤沈下、地割れにより使用不可。道路についても地割れにより舗装面にクラック、段差が生じ側溝、樹等も浮き上がり、陥没により排水不良となった。 <p>☆震災に備えて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 建物、工作物の耐震性の向上 <ul style="list-style-type: none"> 建物、工作物の転倒、落階は直接人命に関係することから新耐震設計以前の物については耐震診断を行い必要に応じて耐震補強する、EXP.J 部のクリアランス、ガラスのクリアランス等は地震動による振幅、歪みを考慮した設計とする必要がある。 建物と共同溝の接合部についても地盤の液状化による共同溝のうきあがり を考慮した設計の必要がある。 ・ エレベーターの停電管制の必要性 <ul style="list-style-type: none"> 大地震のさい停電が発生することから地震管制と共に停電管制装置が必要と思われる。 ・ 高圧ガスボンベの転倒防止 <ul style="list-style-type: none"> 鎖等により壁に取りつけられていたがほとんど全て転倒したことから固定方法を改良する必要がある。 ・ 書棚、薬品棚の転倒防止 <ul style="list-style-type: none"> 薬品棚の転倒は薬品の漏洩、混合による有害ガスの発生、火災の発生する恐れがあること、書棚、ロッカーの転倒も出入り口をふさぎ避難できなくなる危険があることから上記同様改良する必要がある。 ・ 完成図の整備 <ul style="list-style-type: none"> 地震後 2 次災害を防止するため初期消火、危険個所の応急措置をする必要があるが施設の現状を把握できる完成図（給排水、ガス、電力、通信等の系統図）、危険物マップ（燃料タンク、高圧ガスボンベ、薬品等の危険物の所在を記入した配置図、平面図）、防災マップ（消火器、屋内消火栓、避難階段、防火戸等の所在を記入した配置図、平面図）を用意し、担当者がない場合でも迅速に応急措置ができる体制を整備する。 <p>☆結び</p> <p>この度の震災復旧にあたり全国の国立大学から延べ三百数十名の施設部課の職員の支援と文部省文教施設部、文教施設部大阪工事事務所、神戸市港湾局、運輸省第三港湾局の御指導に対して心よりお礼を申し上げます。</p>
6 1	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地震当日の17日夜、余震に怯えて体育館の中に入らず外で寒さに震えていた外国人留学生達と一緒にわれわれ本部要員がたき火で暖をとっていたと

整理 番号	回 答 内 容
(61)	<p>き、ライトバンである会社の寮へ弁当を届ける予定のご夫婦が構内に入って来られた。そして、届けることのできなかつた沢山の弁当と暖かい飲み物を留学生寮に提供してくれ大変有難かつた。</p> <p>1カ月以上経ってから、その方から「自分の住んでいる町に、”われわれ夫婦が当夜弁当を高く売りつけていた”との噂が流れて困っている。」との電話が学生部長（名刺を渡していた）に入ったので、急遽2月28日にその町長宛に「決してそういうことはなく、斯く斯く然々でわれわれは大変助かつた。」との内容の手紙を出した。その後の経過は確認していないが、ご夫婦にとって大変お気の毒であつた。</p> <p>***参考：兵庫県氷上郡青垣町中佐治690-2 堀 金吾ご夫妻 ☎0795-88-0051 Fax0795-88-0439 兵庫県氷上郡青垣町中町 青垣町役場 ☎0795-87-1001 Fax0795-87-1525</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1月20日に本学と何の関係もないタクシー会社から朝「おたくの学生寮に支援物資をお届けする、11時に第1便そして続いて15時半に第2便を届けるので電話連絡していただきたい。」と学生部長に電話が入つた。その後応対して沢山の支援物資が寮に届けられた。 ***参考：大阪の”ともえタクシー”高川氏（☎06-996-2061）・新家・早川氏が寮まで届けてくれた。 ・ 1月21日に深江丸の林船長から、ガソリンをモーターボートで大阪湾沿岸のどこかのスタンドまで買いに行かせるとの連絡があり、万が一のために事情を説明し売っていただくお願いを記した学生部長の名刺と立て替え金をお渡しして買っていただいた。ところが、その後すぐにそのスタンドの社長から「私の留守中に従業員がお金を受け取つたが、こういう時期に代金をいただいては申し訳ない、すぐにお返ししたい。」との連絡が入り、速達にてお金と丁寧なお手紙が届けられた。大変感激した。すぐにお礼の電話を入れた。 ***参考：”湊石油株式会社”代表取締役 宮原 広氏 （大阪市港区築港3-1-9 ☎06-572-6851） ・ 1月23日に日本船主協会から、支援物資を練習船北斗丸にことづけるが、公に頼めないほしいものは何かと問い合わせがあつた。これは大変有難い申し出ですぐにウィスキー、ビールを大量にお願いした。もちろんその他に小型カメラ・フィルム・携帯ラジオ等もお願いした。支援物資にアルコール類をいれるのは不謹慎かも知れないが、やはり身内的な発想から暗にそう言つてきた船主協会に本部当直者は大いに喜んだ。 ***参考：問い合わせてきたのは臼井常務理事 ・ 本部に泊まっていたある早朝、門の所で音がするので行ってみたら、本学に避難しておられるご夫婦が小型の作業車で倒壊した門を通行の邪魔にならないように隅に移動させる作業をしておられた。「何かお役に立ちたい。」と出勤前に職場の作業車を使つていたのだが、そのその心情に感謝して厚くお礼を言つた。 <p>以上震災直後の体験を記しました。</p>

整理 番号	回 答 内 容
62	<p>私の人生において、最大の恐怖であった今回の地震。しかし、また本当にいろいろなことを教えられ、貴重な体験が出来た（している）地震でもあった。家族のこと、離れて住んでいる親のこと、職場のことなど挙げればきりのないようにも思われます。</p> <p>地震が起こるまでの日々は、家族や親のことなど毎日の生活の中で流れており、改めて考えることのない事柄であった。仕事に関しても当然過去の経験上のことや、あらかじめ予定されていることへの対応等を考えておればある程度は無難に時間が経過していた。しかし、そういったことだけでは済まされない事態となったのである。</p> <p>地震の揺れがおさまってどれ位の時間が経過したのかわからないが、地震であったと理解するまでの間、頭の中は真っ白であった。気がつくともどりは真っ暗で、身の回りには何か物が散乱しているようだ。家族の声が聞こえる。無事を確認したが、子供が頭にけがをした様子。しかし、傷は大きくなくひと安心。次第に、目が暗やみにも慣れ家の中の状況がぼんやりとわかってきた。どうしていいのかわからない位ひどい状況である。</p> <p>とにかく家のことは女房に任せ、親のことが心配であるので、車で行くこととした。道路状況がどうなっているのかなど全く考えることなどなく走らせた。まだ早い時間帯であったからか、意外と車は少なかった。しかし、信号機が壊れ、道路に建物が倒れ、いたるところで火事が発生しており、まともに走れる状況ではなかった。</p> <p>何とか親の無事は確認が出来たが、家は全壊状況であった。あんなところでよく助かったものだと思う。取り敢えず、近所の方にお世話になることとした。</p> <p>ここでやっと、職場のことが気がかりになってきた。</p> <p>11時ごろ大学に着いたが、何から手をつけてよいものかわからない。とにかく経験のない状況が目の前に起こっているのである。出勤出来ているのは、大学近辺に住む役職者の方数人を含め十数人であったと思う。まず、職員の安否確認をすることからかかったが、電話が通じなくなっていた。続けるしかなかった。そうするうちに、付近の被災された方々が大学へ避難してくるようになった。これまで避難場所として考えていたのは、資料館講堂であったが、この場所では今回の被災状況からして適さないという考えで体育館を充てることとした。そのうち避難してこられる方が多くなり、体育館のみでは収容出来ないのではないかと、また体育館の床は板張りで冷え込みが厳しいので武道館の方が良いのではないかとということになり、急遽武道館も避難場所とすることとした。とにかく、これから数日の間このような瞬時における判断が求められることが続いたのである。発電機による仮照明、遺体収容場所、避難住民の対応、支援大学の対応等、本当に頭がパニックになる数日であった。その中でも、日本管財派遣のガードマンの方には、避難住民・遺族の方の誘導、支援物資搬入の対応等本当に色々とお世話になった。正門では避難してくる方に避難場所を教え、また、東門では安置された遺体の遺族の方の誘導等24時間体制といえるほどのお世話をあの電気もなく冷えきった暗やみの中で、電池の切れかけた懐中電灯のみでやっていただいた。本学が避難場所提供施設としてその後何とかこなしてこれたのも、このような方のおかげでうまくスタートが切れたのであり忘れてはいけないことだと思われます。</p> <p>やはり、当初は避難されてきた方への対応をどうしていいものかまったくわからなかった。はたして場所の提供のみで良いのだろうか。迷っていてもしかたない。とにかくやれることはやるべきだ。水は4号館受水槽から取れること</p>

整理 番号	回 答 内 容
(62)	<p>がわかった。しかし、どうやって運べよいか。運搬するための車は、車庫からトラックを出すことができた。水を入れる容器類は、学生課が行事用で保管してあるポリバケツなどを使うこととし、何とか手当てすることができた。水については、卒研で残っていた学生が受水槽から少しづつしか出ない水を根気よくためてくれたお陰である。本当にありがとうございました。そうやって避難住民に対し出した水であったが、近隣で被災された方も取りに来るようになり、実に貴重な水となったわけである。</p> <p>私も、食べ物、水を何もとっていない。どうしようか。そこで、不謹慎であるが事務室に残っていた酒のあととビールで空腹と乾きをしのいだのである。あの時のビールは本当にありがたかった。食べ物については、確か二日目だったと思うが、東門でガスもれ騒ぎがありかけつける途中にある先生からいただいた握り飯。本当にうまかった。</p> <p>その夜は、何人かの方が対策本部に泊まることとなった。石油ストーブのみで毛布もない寒さと何の明かりもない暗さ、また、余震の恐怖を感じながら明日からはどうしたら良いのだろうかということを考えながら1月17日は過ぎていった。</p> <p>あの日からもう数か月たった。地震の怖さというものは残ってはいるが、地震対策、防災対策に対する感じ方が少々薄れて来てはいないだろうか。私だけかもしれないが、家庭における日々の対策でも当時は本当に敏感になっていたと思う。やはり、大学においても、マニュアル、規程の整備を進めていき、年に二、三回は震災直後の危機意識を思い出しながら、実際に即した訓練をやっておくことが必要であろう。</p>